

仙台市文化財調査報告書第123集

仙台市岩切

鴻ノ巣遺跡

1989年1月

仙台市教育委員会

訂 正

仙台市文化財調査報告書第123集
「鴻ノ巣遺跡」の27ページと28ページの内容が逆転しておりますので、
お詫びして訂正いたします。

何卒、この件ご了承のうえ、ご一
読下さいますようお願い申し上げま
す。

仙台市文化財調査報告書第123集

仙台市岩切

鴻ノ巣遺跡

1989年1月

仙台市教育委員会

序 文

日頃より文化財行政に対しまして多大の御協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては誠に感謝にたえません。

さて、この度の岩切字鴻ノ巣南、堰下の宅地造成に先だって実施してまいりました鴻ノ巣遺跡の発掘調査は、工事関係者並びに地元住民のご理解のもとで無事完了の運びとなりました。本書はその調査成果を大成したものです。

この地域は古代にあっては、陸奥国分寺と国府多賀城の中間地点にあって、中世に至っては市内でも最も活動のさかんな地域がありました。鴻ノ巣遺跡を含む岩切周辺の歴史をみると、古墳時代以降の集落の営みが顯著であり、古代においては国府である多賀城との関連で、中世に入ると国府および岩切城の留守氏との関係において、歴史的な展開をみせています。このようなことで、県内でも文献と遺跡がより密接に結びつく可能性の強い重要な地域として注目されています。

今回の調査箇所は鴻ノ巣遺跡の東端部に当るところであり、以前に行われた東北新幹線の工事に伴う発掘調査等の成果と合わせて、鴻ノ巣遺跡の全容が徐々に明らかになりつつあります。

この遺跡を含むこの地域の文化遺産は、市民の宝として、永く後世に継承していくことがこれからの一「まちづくり」に大切なことと考えています。市民各位の絶大な御協力を念願して序といたします。

平成元年1月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例 言

1. 本書は宅地造成工事に伴う鴻ノ巣遺跡の発掘調査書である。
2. 本報告書の執筆並びに編集は結城慎一が担当した。
3. 本文中並びに図面上の方位は、磁北に統一して表示してある。なお仙台では磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
4. 本書に掲載した第1図の地形図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台東北部」の一部を縮小して使用したものである。
5. 本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原1973)を使用した。
6. 本報告にかかる調査から報告書刊行に要した費用は、開発側で負担した。
7. 本調査の出土遺物並びに実測図面は仙台市教育委員会が一括保管している。

調 査 要 項

遺跡名：鴻ノ巣遺跡（仙台市文化財登録番号C-135）

所在地：仙台市岩切字鴻ノ巣ほか

調査地：仙台市岩切字鴻ノ巣南、堰下

調査担当：仙台市教育局社会教育部文化財課調査係

試掘担当職員：係長 佐藤 隆 主任 結城慎一 主事 木村浩二

教諭 渡辺雄二

本調査担当職員：主任 結城慎一 教諭 渡辺雄二

調査期間：昭和63年1月28日、2月1日及び4月5日（試掘調査）

昭和63年4月14日～5月19日（本調査）

昭和63年5月23日～9月30日（整理）

調査対象面積：約400m²

調査面積：約185m²

開発者：武山興業（株）仙台支店

調査協力：東海興業株式会社 株式会社宅地開発設計センター 永野三蔵

調査参加者：相沢史子 根本展江 平塚美江 佐藤美子 細井洋子 安達とく子 山口 育

大内鉄一 前田裕志 庄司 大 赤井沢進 庄子第一郎

整理参加者：庄子錦一郎 根本展江

本文目次

序文	
例言	
調査要項	
I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査の方法と経過	3
IV. 基本層位と発見遺構	7
1. 1区	7
2. 2区	7
3. 3区	7
4. 調査区間の比較	8
V. 発見遺構	8
1. 1区	8
2. 2区	17
3. 3区	18
VI. 出土遺物	28
1. 土製品	28
2. その他	35
VII. 考察とまとめ	36
1. 遺物の年代観	36
2. 遺構の変遷	41
3. まとめ	42
註記	43
参考文献	44
写真図版 1～4 遺構 I～IV	45～48
写真図版 5～8 遺物 I～IV	49～52

図 表 目 次

第1図 鴻ノ巣遺跡と周辺遺跡	2
第2図 調査区配図	4
第3図 1区遺構配置と断面図	5、6
第4図 2区遺構配置と断面図	9、10
第5図 3区遺構配置と断面図	11、12
第6図 SD 2、SD 3断面図	13
第7図 SD 4断面図	13
第8図 SD 5断面図	14
第9図 1区SD 7、SD 8、SD 9断面図	14
第10図 1区SK 1断面図、平面図	15
第11図 1区SX 1断面図、平面図	17
第12図 2区SD 1断面図	18
第13図 3区の土坑(1)	19
第14図 3区の土坑(2)	21
第15図 SA 1柱列状遺構	23
第16図 SI 1堅穴遺構	24
第17図 SI 2堅穴遺構	24
第18図 SI 3堅穴遺構	25
第19図 SI 3—粘土器出土状況	27
第20図 出土遺物I	29
第21図 出土遺物II	32
第22図 出土遺物III	33
第23図 出土遺物IV	34
第24図 非クロ土師器甕口縁断面	37
第25図 ロクロ土師器甕口縁断面	39
第26図 須恵器甕拓影及び壺、坏、蓋断面	40
第27図 中世陶器鉢口縁断面及び甕拓影	41
表1 土師器の出土比率	
破片数の単純比率	
m ² 単位破片比率	28

I. 調査に至る経過

岩切周辺は古代から中世まで、国府多賀城に通じる街道筋として栄えた。その岩切地区の一部になる鴻ノ巣遺跡は古墳時代から中世までの遺物が散布するところとして知られていたが、東北新幹線計画に伴う発掘調査等において、実態が把握されつつあった。^(註1)

昭和63年2月、田子グリーンパーク宅地造成工事（5期）が一部鴻ノ巣遺跡にかかるため、協議のうえ、開発者である武山興産（株）仙台支店より、文化財保護法第57条の2に基づき発掘届を提出してもらった。

工事予定地に大きく七北田川の旧堤防が張りだしているため、それ以外で、上下水道管が埋設される道路予定地を調査対象とすることにして、1月28日、2月1日と4月5日の3日間、試掘調査を実施した。それによって地表から遺構検出面までの深さ、出土遺物の種類、およそその年代、遺物包含層の厚さ、遺物、遺構の密度を推察し、本調査の参考とした。

本調査前の協議により、現場で使用する重機並びに現場事務所は開発側で直接準備することとし、それ以外の必要事項を起案、決議、契約のうえ、昭和63年4月12日付で法第98条の2に基づく発掘調査届を提出。調査参加者の募集や器材の準備なども同時に進めながら、4月14日より発掘調査を実施することになった。

II. 遺跡の立地と環境（第1図）

岩切鴻ノ巣遺跡は、仙台市岩切字鴻ノ巣にあり、市の中心部の北東約8kmに位置する。東仙台から利府バイパスを行くと七北田川にかかる岩切大橋に至るが、遺跡はこの七北田川右岸、利府バイパス東側に広がる。

この付近は宮城野平野（仙台平野の一部）が北西の丘陵地帯と接する場所であり、七北田川による自然堤防が発達している。遠く泉ヶ岳に源を発し、丘陵地帯を開析して、西から東へ流れる七北田川は、土砂の堆積と氾濫を繰り返しながら、両岸に自然堤防を形成した。この自然堤防地帯は起伏の少ない平坦面として長く続き、現在は主に畠地や宅地として利用されている。

鴻ノ巣遺跡は右岸の自然堤防上にあり、標高は約10mである。七北田川との比高は約4m、一段低い水田面との比高は1~2mである。

遺跡周辺の歴史的環境をみると、古墳時代の遺跡としては七北田川をはさんで、本遺跡の対岸の自然堤防上に古墳時代中期（南小泉式）の遺物を出土する新田遺跡（多賀城市）がある。ここでは埴輪片も採集されており、付近に高塚古墳があった可能性が強い。さらに西側の丘陵



第1図 鴻ノ巣造跡と周辺道路

地帶には燕沢善応寺、入生沢、台歴敷などの横穴古墳群がみられる。

古代に入ると、東北地方にも律令体制がしかれ、陸奥国の国府である多賀城が本遺跡の東約3 km の丘陵上におかれたため、周辺の自然堤防や北西の丘陵地帶には、燕沢遺跡をはじめ、奈良・平安時代の遺跡が多数存在する。

中世の遺跡では、北西の丘陵に国指定史跡である岩切城がある。これは源頼朝によって、多賀城（陸奥国府）留守職に補任された伊沢（留守）家景の構えた館で、代々留守氏の拠点となっていた。麓に留守氏の菩提寺である東光寺があり、その境内には中世の磨崖仏や板碑が多数残されている。

また、留守文書には鎌倉時代の後半、領内に冠屋市場、河原宿五日市場、在家などの記載がみられるが、当時七北田川は冠川と呼ばれていたことから、鎌倉時代に七北田川流域では集落が発達しており、すでに商業活動が営まれたものと思われる。

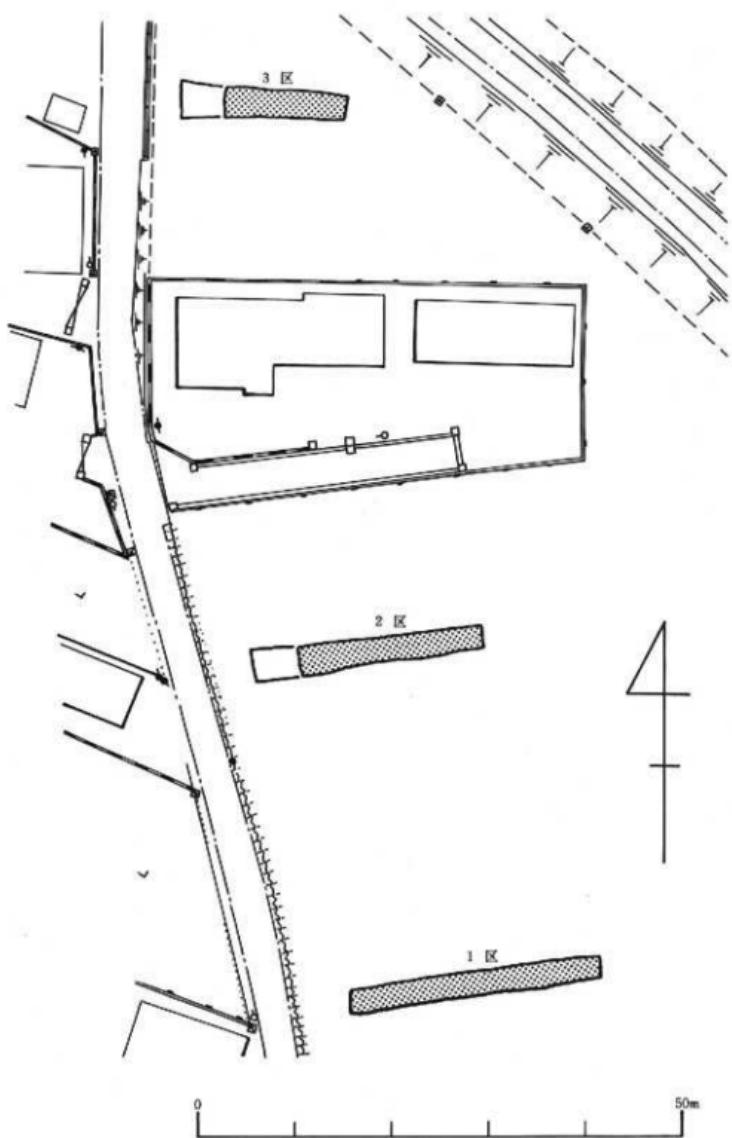
III. 調査の方法と経過 (第2回)

I の「調査に至る経過」でもふれたように、新設される道路に沿って幅3 m を基本として重機により排土した。一番南側に位置する調査区を1区、中間を2区、北側の調査区を3区と呼称することにした。

試掘調査において、1区は遺物の出土が少なかったため、地山（III層）直上まで重機で掘削し、また旧堤防が西側に張り出していたことから、河川跡の検出をもって調査区東端とする考え方で調査区の長さを決めた結果、調査区西端から約23m で河川跡となり、調査区の東端までの長さは26m を計った。

2区、3区は、試掘調査で遺物の出土が多いと判断したため、包含層上まで重機で排土することとし、各々の調査区の長さについては、1区同様の基準で任意に掘削した結果、2区の調査区の長さは23m、その東側約4分の3が河川跡であった。3区の全長は約12m であり、その東端角に河川跡を認めることができた。

4月14日から調査を開始し、5月19日で調査を終了した。七北田川のすぐ隣地であったため地山は砂層であり、地山を掘り込む造構からは常に水が湧いている状態であった。また雨のため何度か調査区の壁が崩落した。



第2図 調査区配置図

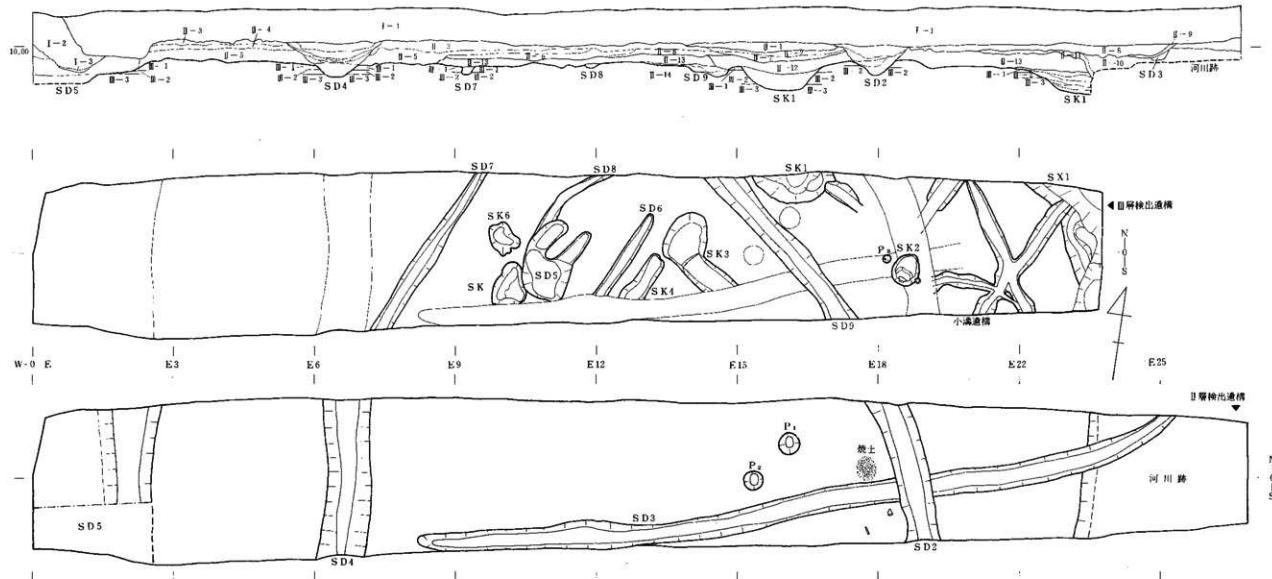


図3-1区造機配置と断面図

IV. 基本層位と発見遺構

1. 1区 (第3図)

三つの調査区では南部に位置し、調査以前においては、旧河川跡が一番入りこんでいるところと考えられていた。

大きく3層に分けられた。I層は褐色を呈する畑耕作土である。調査区西端に最近までの水路がかかっている。層厚は約80cmである。II層は40~50cmの厚さがあり、黒褐色、暗褐色、褐色、にぶい黄褐色のシルト質砂ないしは砂層である。この層出土の土器片を概観すると、ロクロ土器が多量であり、非ロクロ土器、中世陶器が若干である。この層は上面よりSD2、SD4溝跡が検出され、若干下がった調査区東端部からは河川跡が検出された。SD3、SD5溝跡はもう少し下がったレベルから検出されている。以下をIII層として把えた。この層上面からはロクロ土器が主に出土するが、非ロクロ土器も若干混在する。上面で検出した遺構はSD5~9溝跡、SK1土坑、SX1性格不明遺構などである。

III層上面レベルは標高約9.6mである。

2. 2区 (第4図)

3調査区の中間に位置し、4層に大別した。

I層は褐色シルト質砂で耕作土にあたる。この層には宅地造成用の盛土も含まれるが、土色・土性等は特にチェックしていない。II層は褐色ならびににぶい黄褐色を呈するシルト質砂ないしは砂の層である。この層出土土器片は、ロクロ使用のものが未使用のものより少し多く見られるほか、中世陶器も若干出土している。II層上面で検出できた遺構は、調査区中央部より東側に河川跡である。II層の層厚は40~50cmである。III層は褐色、暗褐色、黒褐色を呈するシルト質砂及び砂層で、層厚は20~30cmである。この層からの出土遺物が、特に上面で検出できたSD1溝跡周辺に多く、その出土傾向を土器片でみると、ロクロ使用のものが圧倒的に多い。以下IV層である。にぶい黄褐色シルト質砂を上層にしており、III層とは対象的に出土遺物がない。

IV層上面レベルは標高9.7~9.9mである。

3. 3区 (第5図)

3調査区中では北側の調査区で、現在の七北田川堤防に接するところである。そういう場所であるので、調査区全体が河川跡中に入る場合と、旧河川が蛇行していて、調査区内に全くかからない場合が想定された。

3層に大別できた。I層は灰黄褐色を呈するシルト質砂の層である。畑耕作土であったのであろうが、最近まで作業場があったところであり、上面から新旧の建物基礎抜き取り穴がみら

れる。II層は暗褐色、黒褐色、にぶい黄褐色を呈するシルト質砂主体の層であるが、II-2層及びII-10層は粘質シルトである。II-2層及びII層上面から掘り込まれているSK8、SK9土坑については現代の可能生を否定できない。II層出土の土師器片で言えば、ロクロ土師器は少量であるのに対して、非ロクロ土師器は多量に出土している。II層中検出遺構としてはSK1～11土坑がある。III層は灰黄褐色砂と黒褐色粘質シルトの層である。III層が残存しているところが若干であるため、出土遺物も非ロクロの土師器が若干である。この層からの検出遺構はSA1柱列状遺構、SI1～3竪穴遺構、SK12～14土坑などがある。また河川跡が調査区南東角に若干かかって検出された。この下がIV層になるが、基本的に遺物包含層ではない。

I層は約40cm、II層は約80cm、III層は約10cmの層厚であり、IV層上面の標高は約9.8mである。

4. 調査区間の比較

ここで3調査区の状況が若干ずつ異なるので、調査区間の層の比較をしておきたい。まず前提として把握しておきたいことは、当調査区のみならず、鴻ノ巣遺跡のほぼ全域が七北田川による堆積作用によって形成された自然堤防上に立地していることである。よって前述した各層以下が完全な無遺物とは言えないし、今回の調査で検証した各層も堆積作用の一断面を示している。

大きく各調査区を見るとI層は耕作土を中心とする表土層なので共通。1区のII層は2区のII・III層、3区のII層に共通すると考えられる。1区のII層上部及び2区のII層ではロクロ土師器片に混じて中世陶器片が若干出土し、上面から掘り込まれている遺構には砂の堆積が多い。灰白色火山灰は1区II-13層で発見されたピット、土坑より若干検出されたが、他区では認められなかった。また1区II-13層を中心に細かい白色の砂粒を暗褐色シルト層に含むが、それと類似する層は2区のIII-3～5層に見られる。1、3区のII層下部及び2区III層は、ロクロ土師器と非ロクロ土師器の比が、1区で4.5:1、2区で2:1、3区で1:28.5である。3区III層に当たる層は1、2区では認められない。

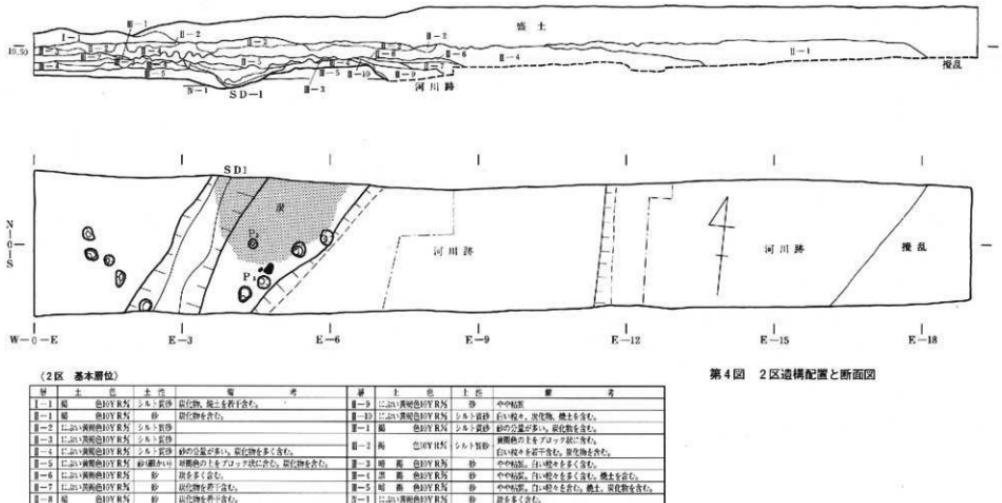
V. 発見遺構

1. 1区（第3図）

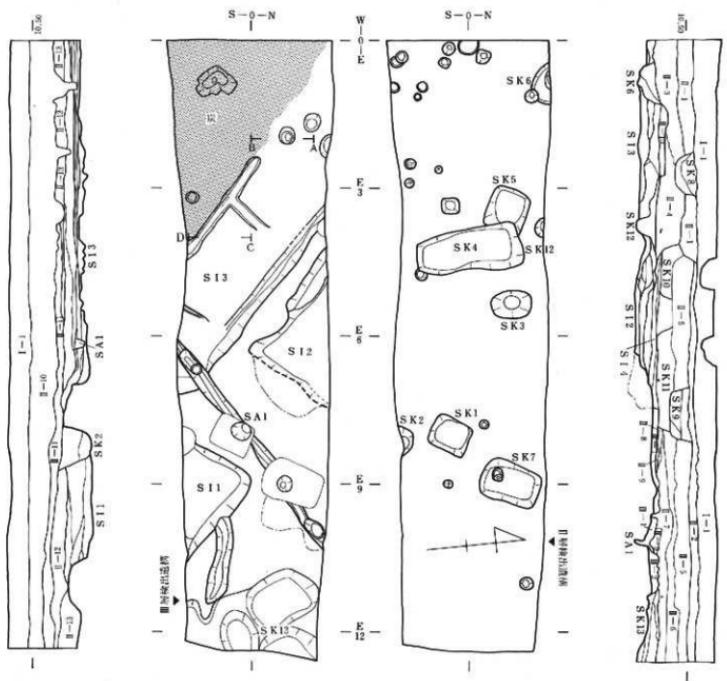
この調査区で検出された遺構は溝跡9、小溝遺構1、土坑7、焼土遺構1、ピット、その他性格不明遺構、河川跡がある。

(1) 溝跡

SD2溝跡（第6図） E18～19mの位置に南北方向に検出された。中心軸の方向は磁北に対



第4図 2区造構配置と断面図



〈3区 基本属性〉

原	上	中	下	被	原	上	中	下	作
一	山	田	日	トヨ	化	化	化	化	化
二	日	月	月	シヅ	化	化	化	化	化
三	火	火	火	ヒ	化	化	化	化	化
四	水	水	水	スイ	化	化	化	化	化
五	土	土	土	トト	化	化	化	化	化
六	人	人	人	ヒト	化	化	化	化	化
七	口	口	口	ヒガ	化	化	化	化	化
八	目	目	目	ヒメ	化	化	化	化	化
九	耳	耳	耳	ヒツ	化	化	化	化	化
十	口	口	口	ヒガ	化	化	化	化	化
十一	火	火	火	ヒ	化	化	化	化	化
十二	水	水	水	スイ	化	化	化	化	化
十三	土	土	土	トト	化	化	化	化	化
十四	人	人	人	ヒト	化	化	化	化	化
十五	口	口	口	ヒガ	化	化	化	化	化
十六	目	目	目	ヒメ	化	化	化	化	化
十七	耳	耳	耳	ヒツ	化	化	化	化	化
十八	口	口	口	ヒガ	化	化	化	化	化
十九	火	火	火	ヒ	化	化	化	化	化
二十	水	水	水	スイ	化	化	化	化	化
二十一	土	土	土	トト	化	化	化	化	化
二十二	人	人	人	ヒト	化	化	化	化	化
二十三	口	口	口	ヒガ	化	化	化	化	化
二十四	目	目	目	ヒメ	化	化	化	化	化
二十五	耳	耳	耳	ヒツ	化	化	化	化	化
二十六	口	口	口	ヒガ	化	化	化	化	化

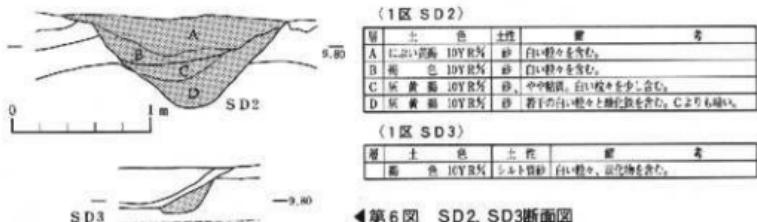
第5図 3区構造配置と断面図

して西偏20°である。検出面はII層上面で深さは約60cm、上端幅は約1.5mを計る。SD 3溝跡、小溝造構、SK 2土坑を切っている。底面レベルから見ると北側に流れていたらしい。

堆積土は大きく2層に分かれ、上層はA、B、下層はC、Dとさらに細分される。上層が砂層、下層が粘質砂層である。

出土遺物はロクロ土器器坏、甕、壺片が20点ほどと、非ロクロの壺類の破片が若干である。
SD 3溝跡（第6図） 東西に長い調査区を南西から北東方向に検出された。SD 2溝跡に切られ、河川跡、小溝造構、SK 2土坑、SD 6・9溝跡などを切っている。底面レベルによって流れの方向は把えられないが、南西端がSD 7溝跡より若干東側において細くなつて途切れているので、北東側へ流れたものであろう。検出面はII-13層上面になる。上端幅40~50cm、深さ約20cmの断面逆台形を呈するものである。

堆積土は単層で褐色シルト質砂である。出土遺物はロクロ土器器坏、甕、壺片のほか、非ロクロ土器器坏、壺片及び須恵器の器坏、壺片も若干出土している。



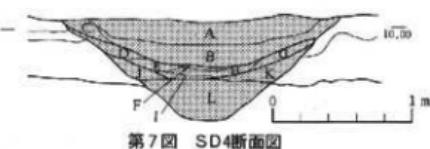
◆第6図 SD2, SD3断面図

SD 4溝跡（第7図） E6.5m付近地点にあり、南北方向の溝である。中心軸の方向は磁北より4°西に偏しているだけである。検出面はII層上面、調査北壁側に深くなつており、約70cmを計る。

堆積土は三つに大別できる。上層は褐色ないしにぶい黄褐色の砂層。中層はにぶい黄褐色のシルト質砂、粘質シルト、砂の細い各層からなつていて。下層はにぶい黄褐色砂層である。

出土遺物はない。

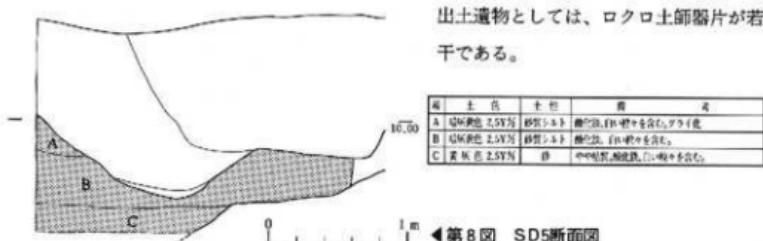
(1区 SD4)			
層	土色	土性	備考
A	赤い褐色 10YR 5/4	砂	細砂。
B	褐色 10YR 5/4	砂	Aより細かい。
C	褐色 10YR 5/6	砂	
D	にぶい黄褐色 10YR 5/6	シルト質砂	細粒を含む。
E	にぶい黄褐色 10YR 5/6	シルト質砂	細粒のそれを含む。細粒を含む。
F	にぶい黄褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	細粒化。
G	にぶい黄褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	細粒化。
H	にぶい黄褐色 10YR 5/6	砂	やや粗粒。細粒を含む。
I	にぶい黄褐色 10YR 5/6	砂	やや粗粒。細粒化。
J	にぶい黄褐色 10YR 5/6	砂	やや粗粒。細粒化。
K	灰褐色 10YR 5/6	砂	細粒を含む。
L	にぶい黄褐色 10YR 5/6	砂	細粒。



◆第7図 SD4断面図

S D 5 溝跡 (第8図) 調査区西端に南北方向に検出された。この溝の上に最近まであった排水路が重なっているので、本来の掘り込みがII層上面なのか、それともII層中なのかはっきりしない。

堆積土は暗灰黄色ないしは黄灰色の砂質シルト及び砂で、上部は新しい排水路に影響されてグライ化している。

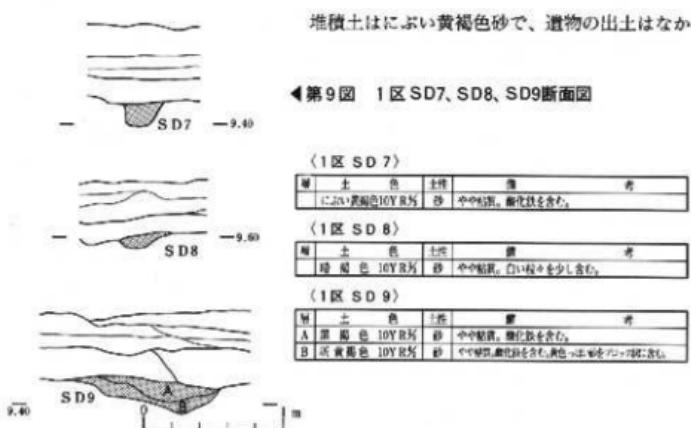


S D 6 溝跡 E 12~13m のところに位置し、III層上面で確認された。磁北より約30°東に偏した南北方向の溝で、南側は S D 3 溝跡に切られ、北側は調査区北壁の手前約90cm のところで途切れる。幅約30cm で深さは 3 ~ 4 cm と浅い。

堆積土は暗褐色のシルト質砂で、遺物の出土はなかった。

S D 7 溝跡 (第9図) E 7~10m 間にあり、III層上面で確認された。N-25°-E の南北方向の溝跡で、幅が20~40cm、深さ約15cm である。確認面からの深さはほぼ一定であるが、底面レベルは北側が約 9 cm 低い。

堆積土はにぶい黄褐色砂で、遺物の出土はなかった。



S D 8 溝跡 (第9図) E11m ポイントのところに S K 5 土坑があるが、それより北北東方向へカーブを描くように確認された。S D 5 土坑と同一のものか、切り合い関係にあるのか不明である。確認幅は約20cm、深さは0~7cmである。確認面はIII層上面である。

堆積土は暗褐色砂で、出土遺物はない。

S D 9 溝跡 (第9図) E14~18間のIII層上面で検出された。N-45°-W ほどの北西—南東の方向をもつ溝跡である。S D 3 溝跡に切られている。幅は40~60cmで、深さは15~20cmほどである。底面レベルをみると若干の凹凸があり一定ではないが、調査区内でどの方向へ傾斜する溝跡かの判断はできなかった。

堆積土は黒褐色砂と灰黄褐色砂で、遺物の出土はみられなかった。

(2) 小溝遺構

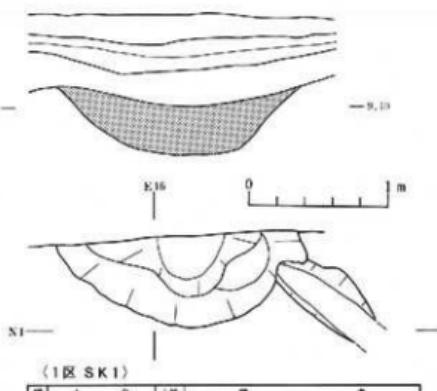
E17~23の間のIII層上面で数条の小溝跡が交差するように検出された。確認幅は10~20cm、40~50cmとまちまちであり、深さも0~20cmほどとばらつきがある。方向は西偏約30°、60°のものと、東偏約30°、35°のもののほか、西偏約80°とほぼ東西方向のものもある。それぞれの小溝どうしの重複関係は不明である。S D 2、3 溝跡に切られている。S K 1 土坑及びS X 1 性格不明遺構と交わる小溝があり、これも重複関係不明であるが、小溝跡の底面をみるとSK 1、S X 1 の方に落ち込んでいくような傾斜を示すので同時存在の可能生が強い。

堆積土は暗褐色と灰黄褐色のシルト質砂であり、鉄滓やロクロ、非ロクロの土師器が若干混入している。

(3) 土坑

S K 1 土坑 (第10図) E15~18間で、調査区北側に半分かかった状態でIII層上面で検出された。小溝遺構の一つが土坑に落ち込むように検出され、それらと同時存在が考えられる状況であった。他の遺構との切り合い関係はない。

おそらく梢円形を呈する土坑と思われ、長軸約1.8m、深さ約50cmを計る。堆積土は灰黄褐色のやや粘性のある砂である。



第10図 1区 SK 1断面図、平面図

S K 2 土坑 E19、N-0-S から S 1 付近に発見され、SD 2、SD 3 溝跡に切られている。

残存している土坑の大きさは、平面形が70×60cm の横円形で、深さは10cm 位である。

堆積土は黒褐色シルトであり、底面付近からは土師器の环と甕片が出土している。

S K 3 土坑 E14~15付近にある不整形なものである。SD 3 溝跡に切られており、堆積土は褐灰色の砂質シルトである。深さは7 cm 程の部分と12cm 程の部分があり、大きく二つに分かれている。

S K 4 土坑 E13付近にあり、SD 3 溝跡に切られている。SD 6 に平行するようにあり、検出面で、幅約40cm、長さ約1 m、深さ1~20cm とSD 3 側に深くなっている。堆積土は褐灰色砂質シルトである。

S K 5 土坑 E11付近にあり、南端がSD 3 溝跡に切られている。径約1 m の変形な円形土坑から北東側に2本の溝状土坑が伸びているが、これらを一体として扱った。深さは2~10cm とまちまちである。SD 8 溝跡、SK 7 土坑を切っている。

堆積土は火山灰を含む褐灰色シルトである。

S K 6 土坑 E12付近にあり、50×60cm の平面の大きさで、深さが10cm 程である。堆積土は褐灰色の砂質シルトである。切り合い関係は認められない。

S K 7 土坑 E12付近にあり、南側がSD 3 溝跡に切られている。70×90cm の平面規模をもち、深さは5~10cm 位である。堆積土は褐灰色砂質シルトである。

(4) 焼土遺構

焼土遺構といつても焼土を中心とした炭の散布範囲としか把えられなかった。検出面はII層上面である。散布範囲はE15からSD 2 溝跡まで、E18、N-0-S 付近に赤変した焼土ブロックが見られる。SD 2 溝跡で切られている状況である。これに伴うと思われるビット、溝等の遺構の検出はない。

(5) ビット

P 1 E16付近でP 2と共に焼土遺構を削り下げることにより検出された。層位的にはII層上面で検出されたSD 2 溝跡や焼土遺構よりは下になり、ほぼSD 3 溝検出層に合致するようである。径約45cm、深さ約30cm のものである。堆積土は明褐灰色のシルト質砂で火山灰を含んでいる。

P 2 E15付近にあり、検出層位、堆積土はP 1と同様である。規模もP 1とほぼ同じで、径約40cm、深さ約25cm を計る。

P 3 SK 2 土坑と共に、すぐ西隣りで検出された。SD 3 溝跡に切られている。径20cm ほどで、深さは約15cm を計る。堆積土は褐灰色シルト質砂である。

(6) その他

S X 1 性格不明遺構 (第11図) 調査区の東端付近に、河川跡の砂等に覆われるような状況でIII層上面で検出された。SK 1土坑と同様、小溝遺構と一体になっているようである。鉄滓の出土がある。

堆積土は暗褐色、灰黃褐色、にぶい黃褐色の砂であり、炭を多く含んでいる。検出した部分での深さは約50cmである。

第11図 1区 SX1断面図、平面図▶

(1区 SX1)

場	土色	土性	特
A 暗褐色 10YR 4/2	沙	中砂質、酸化鉄を含む。炭化物を若干含む。	
B 灰黃褐色 10YR 5/2	沙	中砂質、酸化鉄を含む。多量の炭化物を含む。炭を含む。	
C 黃褐色 10YR 6/2	沙	酸化鉄、炭化物を含む。	
D 淡黃褐色 10YR 6/2	沙	中砂質、酸化鉄を含む。炭化物をやや含む。	
E 二ぶい黃褐色 10YR 6/2	沙	酸化鉄、炭化物を含む。	
F 淡黃褐色 10YR 6/2	沙	酸化鉄、炭化物を含む。	

河川跡 調査区最東端にSX 1性格不明遺構の堆積土をやや削るように検出されているが、調査区全般をみれば、E21付近のII層上面まで河川堆積層をおえる。SD 3溝跡は河川跡の堆積土を切っている。

2. 2区 (第4図)

この調査区で検出された遺構は溝跡1、ピット多数、その他焼土遺構、河川跡である。

(1) 溝跡

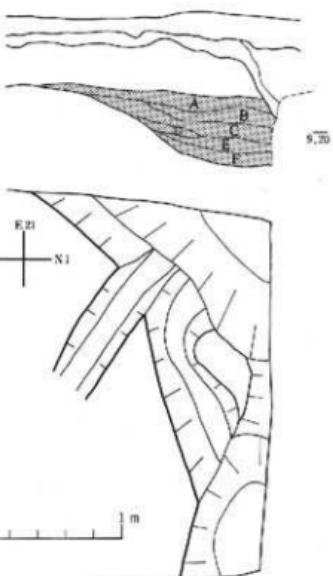
SD 1溝跡 (第12図) 調査区西端より東へ3mのE 3付近に南北方向に検出された。中心軸の方向は磁北に対して東偏25°である。検出面はIII層上面で深さは約50cm、上端幅は約2.2mを計る。

堆積土はA～Eに分けられたが、Dには後述する焼土遺構に関連すると思われる焼土、炭の混入が多い。

出土遺物には土師器のロクロ坏片が多くみられ、次いでロクロ未使用の土師器壺片と思われるものが多い。須恵器片も若干出土している。

(2) ピット

W-0-EからE 6間に10コほど確認出来た。検出面はII層上面である。径が20～30cmで深さが50～60cmのものがほとんどである。堆積土はいずれも褐灰色砂である。出土遺物はほとん



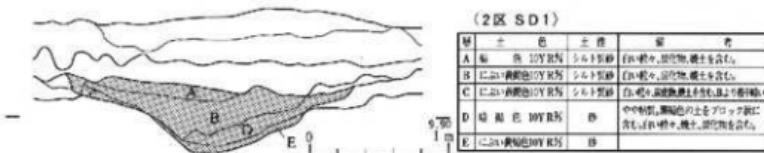
どないが、P 1より鉄製品、P 2より有孔石製品が出土している。

(3) 燃土遺構

E 3～E 6 間のIII～V 層中心に検出された。1 区の燃土遺構同様、関連遺構は不明である。前述した SD 1 溝跡の下層に燃土や炭が流入して堆積したと考えられるものがある。検出された範囲で特に赤変が激しい部分は E 4.5 の北壁付近である。

(4) 河川跡

E 4.5～E 7 に河川跡の西岸が検出され、調査区のほぼ 3 分の 2 が河川跡で占められる状況である。出土遺物はそう多くないが、上層からは中世陶器片、その下からは土師器片が若干出土する。E 12 付近でさらに段が形成され、河川の東側への変遷が伺える。



第12図 2区 SD1 断面図

3. 3区(第5図)

この調査区で検出された遺構は土坑13、柱列状遺構1、竪穴遺構4、ピット多数である。

(1) 土坑

SK 1 土坑(第13図) E 8、N-0-S 付近に検出された。80×70cm のほぼ方形のプランを呈し、深さは約45cm である。検出面はIII層上面である。

堆積土は黒褐色とにぶい黄褐色の砂であり、上層のほうに、ロクロを使用及び未使用の土師器片や須恵器片が含まれている。

SA 1 柱列状遺構を切っている。

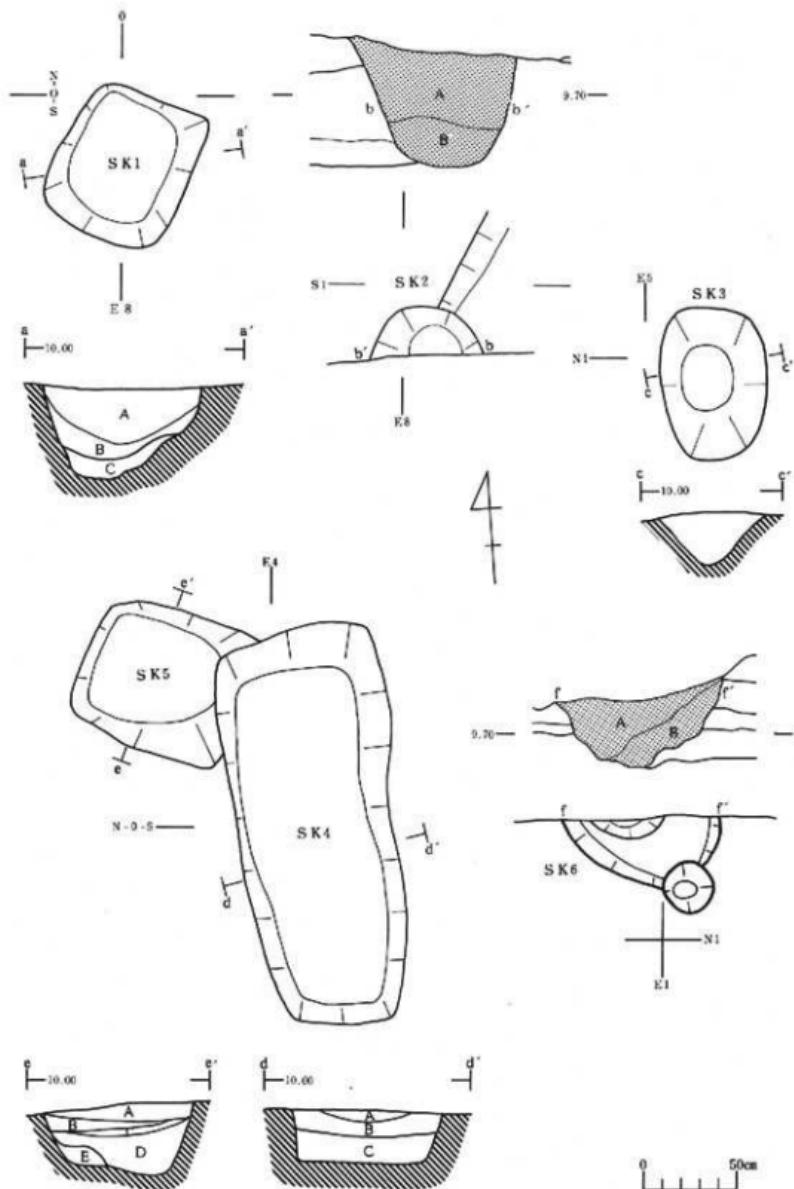
SK 2 土坑(第13図) E 8 の位置で、調査区南壁外に半分かかっている。径約60cm、深さ約60cm の円形プランを呈するものと思われる。検出面はIII層上面である。

堆積土は黒褐色粘質シルトとにぶい黄褐色砂であり、非ロクロ、ロクロの土師器片、須恵器片を若干含んでいる。

SI 1 竪穴遺構を切っている。

SK 3 土坑(第13図) E 5、N 1 付近に検出された。80×60cm ほどの楕円形プランを呈し、深さは約30cm である。検出面はIII層上面である。

堆積土は黒褐色の砂である。出土遺物は非ロクロの壺や甕片が多く、他にロクロを使用している土師器片、須恵器片もある。



第13図 3区の土坑(1)

(3区 SK 1)

層	土 色	土 性	備	考
A	黒褐色 10YR 5/2	砂	やや粘質。酸化鉄、炭化物を少量含む。遺物を含む。	
B	黒褐色 10YR 5/2	砂	炭化物を少量含む。	
C	黄褐色10YR 5/2	砂	酸化鉄を含む。	

(3区 SK 2)

層	土 色	土 性	備	考
A	黒褐色 10YR 5/2	粘質シルト	砂よりじり、更に若干含む。	
B	黄褐色10YR 5/2	砂	炭化物を含む。黄褐色土と褐褐色土とを複数方に含む。	

(3区 SK 3)

層	土 色	土 性	備	考
黒褐色 10YR 5/2	砂	やや粘質。酸化鉄、炭化物を粒状に含む。遺物を含む。		

(3区 SK 4)

層	土 色	土 性	備	考
A	黒褐色 10YR 5/2	粘質シルト	炭化物を粒状に少量含む。酸化鉄を含む。	
B	黒褐色 10YR 5/2	粘質シルト	酸化鉄、炭化物を少量含む。	
C	黄褐色 10YR 5/2	砂	やや粘質。炭化物を少量含む。黄色っぽい土を含む。	

(3区 SK 5)

層	土 色	土 性	備	考
A	黒褐色 10YR 5/2	砂	やや粘質。酸化鉄を含む。	
B	黒褐色 10YR 5/2	砂	やや粘質。酸化鉄を含む。	
C	暗褐色 10YR 5/2	砂	やや粘質。酸化鉄、炭化物を含む。	
D	黒褐色 10YR 5/2	砂	やや粘質。酸化鉄、炭化物を含む。一部黃色土をブロック状に含む。	
E	黒褐色 10YR 5/2	砂	下半分に多量の炭化物を含む。酸化鉄を含む。	

(3区 SK 6)

層	土 色	土 性	備	考
A	黒褐色 10YR 5/2	砂		
B	黒褐色 10YR 5/2	砂	黄褐色土を若干含む。	

S I 2 壓穴構造を切っている。

S K 4 土坑 (第13図) E 4付近にある南北に長軸をもつ長方形プランの土坑である。規模は、平面の大きさが約2.1×0.8mで、深さが約30cmである。検出したのはIII層上面であるが、II層中からの掘り込みと考えられるものである。

堆積土は黒褐色粘質シルトと灰黄褐色の砂で、炭を含んでいる。出土遺物は非ロクロの壺や甕片がほとんどで、ロクロ土師器片は確認されていない。他に須恵器片が若干出土している。

S K 5 土坑 S I 3 壓穴構造を切っている。

S K 5 土坑 (第13図) E 3、N 1付近にSK 4 土坑に切られるような状況で検出された。検出面はIII層上面である。ほぼ80×90cmの正方形に近い平面形で、深さは約55cmを計る。S I 3 壓穴構造を切っている。

堆積土は黒褐色、暗褐色、褐色を呈する砂で、底面付近に多量の炭を含む部分がある。出土遺物は非ロクロの壺ないし甕の土師器片である。

S K 6 土坑 (第13図) 調査区北壁に半分かかったものでE 1付近に当る。検出したのはIII層上面と同レベルであるが、II層下部からの掘り込みが断面から観察される。径約80cm、深さ約40cmのものである。S I 3 壓穴構造を切っている。

堆積土は黒褐色砂で、出土遺物は非ロクロ土師器の壺や甕片である。

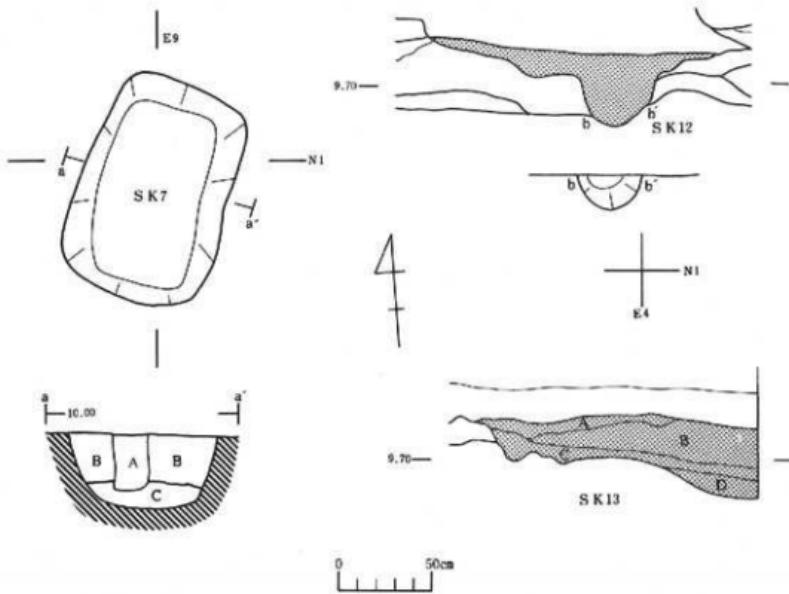
S K 7 土坑 (第14図) E 9、N 1を中心とするところに位置している。検出面はIII層上面である。平面形は1.2×0.8mほどの長方形で、深さは約40cmである。S A 1柱列状構造を切ってい

る。

堆積土は黒褐色とにぶい黄褐色の砂で、中央に柱痕跡と見られるものが検出されている。出土遺物は非ロクロの壺ないしは壺の土師器片がほとんどであるが、ロクロ使用の土師器片も若干出土している。

SK 8 土坑 E 3付近の調査区北壁に断面として確認した。II層上面から掘り込みが確認できる。幅約90cm、深さ約40cmのものである。

堆積土はにぶい黄褐色と黒褐色シルト質砂の2層であり、炭や焼土を含んでいる。



(3区 SK 7)

層	土 色	土 性	特	考
A	黒 色 10Y R 5%	砂	やや粘性。	
B	黒 色 10Y R 5%	砂	やや粘性、酸化鉄、炭化物を少許含む。遺物を含む。	
C	にぶい黄褐色 10Y R 5%	砂	酸化鉄を含む。	

(3区 SK 12)

層	土 色	土 性	特	考
黒 色 10Y R 5%	砂	炭を若干含む。		

(3区 SK 13)

層	土 色	土 性	特	考
A	にぶい黄褐色 10Y R 5%	砂	酸化鉄、炭を若干含む。	
B	灰 黄褐色 10Y R 5%	砂	炭化物をブロック状に含む。酸化鉄、炭を含む。	
C	灰 黄褐色 10Y R 5%	砂	酸化鉄、炭を含む。	
D	灰 黄褐色 10Y R 5%	砂	酸化鉄を含む。	

第14図 3区の土坑(2)

S K 9 土坑 E7.5付近の北側断面に確認できた。II層上面から1層下ったII-5層より掘り込みが見られる。幅約1.15m、深さ約40cmのものである。

堆積土は3分されるが、いずれも黒褐色シルト質砂で炭、焼土を含み、類似している。

S K 10 土坑 E4.5付近の調査区北側断面に認められた。S K 8、9土坑より下のII-1、5層からの掘り込みが確認された。上幅約1.1m、深さ約40cmのものである。

堆積土は黒褐色シルト質砂で炭や焼土をブロック状に含むものである。

S K 11 土坑 ほぼE 6～8に位置し、調査区北壁に断面として把握された。S K 10土坑同様II-5層から掘り込みが認められ、S K 9土坑の底部がS K 11土坑の確認層東端を切っている状況である。上幅約2.1mで深さは35cmほどである。

堆積土は炭を若干含む黒褐色シルト質砂で、底面直上の堆積土には布目瓦片が1片認められた。

S K 12 土坑（第14図） E 4付近の北壁に半分かかって検出された。断面よりII-4層から掘り込まれているのがわかる。形態的には幅約1.5mで深さ約10cmの浅い土坑が、さらにその東端近くで径約40cm、深さ約20cmに落ち込むものである。

堆積土は黒褐色の炭を若干含む砂である。

S I 2、3 穫穴遺構を切っている。

S K 13 土坑（第14図） E 12付近を中心として、調査区東端部にある。さらに東方の河川跡の方に1区のS X 1不明遺構のように下っているが、S X 1ほど急な傾斜にはならず、また浅い凹地の連続で構成されている。検出面はIII層上面である。

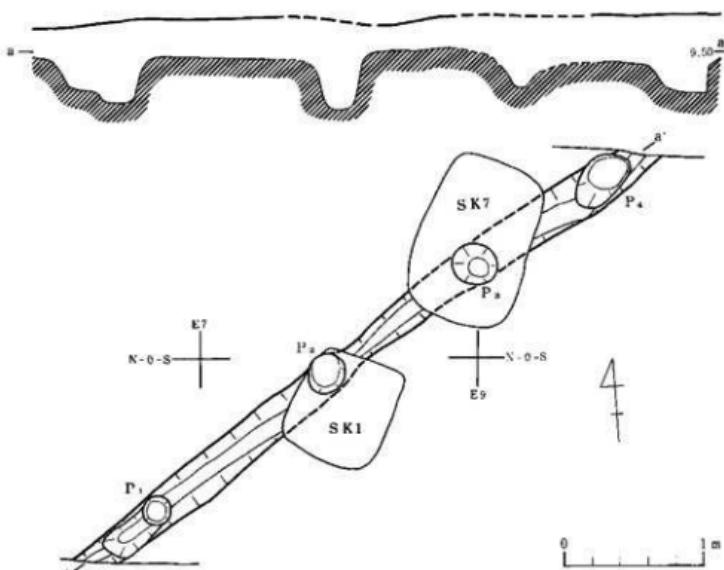
堆積土はにぶい黄褐色砂と灰黄褐色砂であり、出土遺物は非クロロの土師器壺・甕片が大部分で、他は坏・高环片である。

（2）柱列状遺構

S A 1 柱列状遺構（第15図） E 6～10.5にかけて、調査区内を斜めに横切っている。軸方向は磁北から65°東へ偏している。検出面はIII-3層上面である。当S A 1はS K 1、S K 7土坑に切られS I 3 穫穴遺構を切っている。

このS A 1柱列状遺構は上幅約30cm、深さが20～30cmほどの溝と、径20～30cmほどで、深さが検出面から50～65cmほどのビットによって構成されている。ビットはほぼ軸上にのっており、ビット間隔はP₁側からP₄側に計って、それぞれ1.58、1.38、1.15mである。ビット間隔は一定ではないが、溝は状況よりビットに対する溝状の掘り方と思われ、S A 1を柱列状遺構として把握しておきたい。

堆積土は、溝状掘り方においては灰黄褐色砂で、柱痕と考えられるビットにおいては黒褐色シルト質砂である。



第15図 SA1柱列状遺構

(3) 壺穴遺構

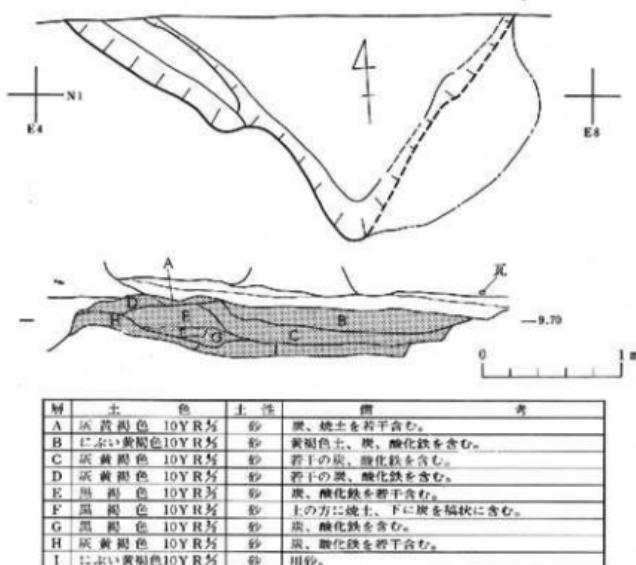
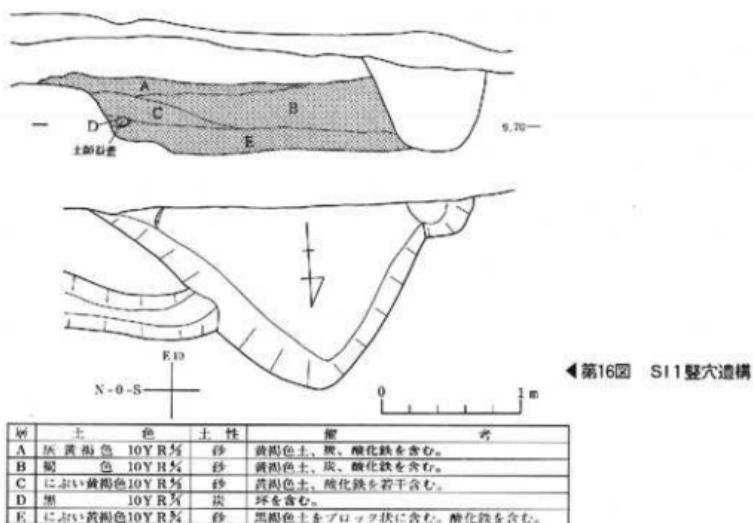
S I 1 壺穴遺構 (第16図) E 9付近の調査区南半に北東角が北辺約1.6m、東辺約2.1mにわたって検出された。検出面はIII-3層である。深さは約50cmである。SK2土坑に切られている。また東辺に幅約30cmの溝が長さ約2.2mにわたって接しているようであるが、調査において、それぞれの切り合い関係を明らかにすることはできなかった。

他に壺穴遺構として平面的に把えたものにはS I 2、S I 3があるが、互いに東西辺がN-50°-Wに近く、互いに意識しあった位置関係である。

堆積土は灰黄褐色やにぶい黄褐色などの砂であるが、一部に炭を多量に含む層が見られ、そこより唯一完形の非クロロ土師器壺(第21図2)が出土している。この壺を含めて、堆積土からの出土遺物は、非クロロの土師器の壺と甕片である。

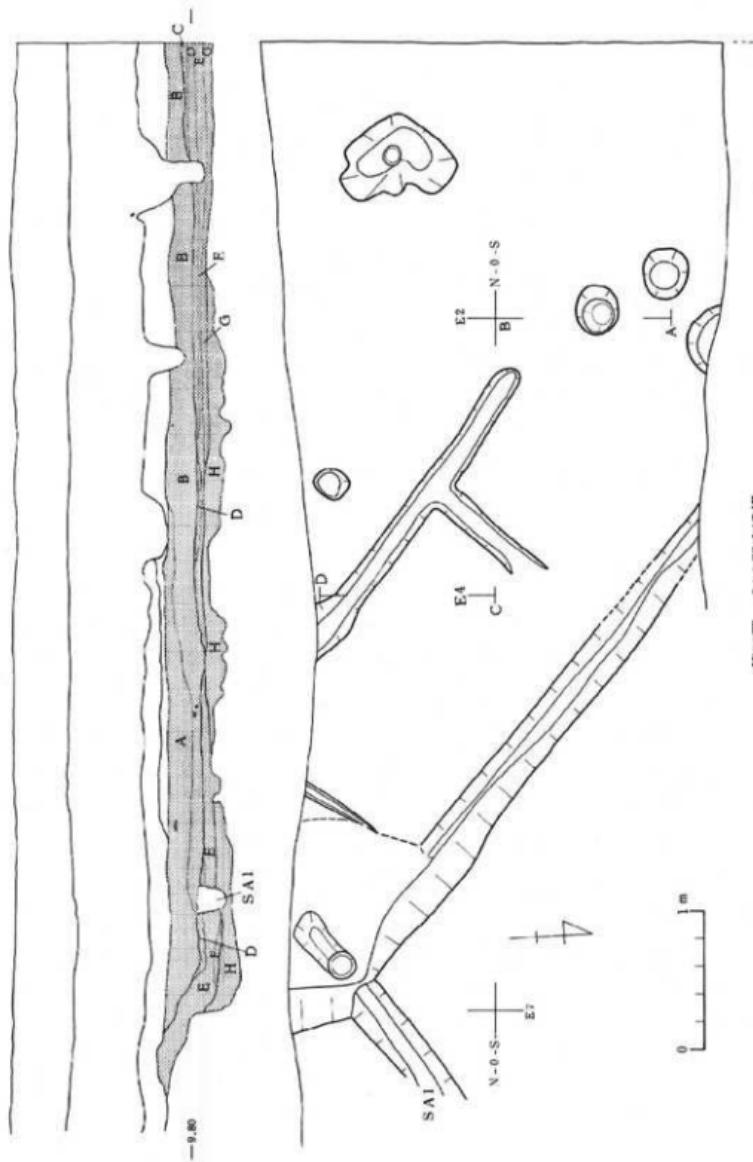
S I 2 壺穴遺構 (第17図) E 4～8の調査区北半に、南西角を中心として2辺が約2.5mと2m検出された。検出面はIII-3層である。深さは約35cmである。SK3、12土坑に切られている。S I 1、3壺穴遺構との並行関係が考えられる位置にある。

堆積土は灰黄褐色、にぶい黄褐色、黒褐色を呈する砂であり、全体的に炭を混入する。特に



第16図 S11堅穴造構

第16圖 S13號穴遺物



(SI 3 土層註記)

層	土色	土性	備考
A	にじい黄褐色10YR 5/4	砂	黒褐色土と混じり状に含む。
B	灰褐色土 10YR 5/2	砂	若干の炭と腐化鉄を含む。
C	灰褐色土 10YR 5/2	砂	黒褐色土を含む。
D	灰褐色土 10YR 5/2	砂	黒褐色土を含む。大粒を含む。
E	にじい黄褐色10YR 5/4	砂	黒褐色土と腐化鉄を含む。
F	にじい黄褐色10YR 5/4	砂	黒褐色土と腐化鉄を含む。
G	にじい黄褐色10YR 5/4	砂	黒褐色の粘土ワックスを含む。腐化鉄を含む。
H	にじい黄褐色 10YR 5/4	砂	黒褐色土、黒褐色土、黒褐色土を含む。

E～H層には炭の混入が多く、下層上面には焼土を認めることができる。堆積土中から非クロロ土器の壺や壺片が多く出土するほか、高坏片も若干出土する。

S I 3 竪穴遺構(第18図) E 7までの調査区西部に広く位置している。E 7南壁寄りに北東角があり、2辺が約50cmと約4m検出できた。検出面はS I 1、2同様、III-3層である。S I 1、2でもふれたように、それらと並行関係が考えられる位置にある。SA 1柱列状遺構、SK 4、5、6土坑に切られている。

検出面から床面までの深さは30～50cmで、北壁に沿って3cmほど浅い溝が伴っている。また約1.5mはなれた南側に浅い溝が平行するほか、そこより北壁に直交するような浅い溝が2条検出された。E 2付近の北半とE 3付近の南壁寄りにはピットが認められる。またE 1付近の南半には土坑が検出された。この土坑には炭に多く堆積していたほか、焼土も若干混入していた。この土坑の壁及び底面は赤変していない。

堆積土はにじい黄褐色、灰黄褐色の砂である。全体的には若干の炭粒は含むが、C、D層と床面検出の前記土坑周囲には特に多い。

出土遺物は非常に多く、特に非クロロの土器の壺や壺片がほとんどである。他に高坏片や須恵器の壺片がある。出土位置はC、D層上面と床面直上に特に多い。C、D層上面の一括遺物は第5、18図中にA-B、C-Dの実測位置を示し、第19図に出土状況を図示した。それぞれの遺物はA-B一括で取り上げたものが第21図14、C-D一括で取り上げたものが第21図4である。床面直上の遺物が多量に出土した位置はE 1までの南半である。

(4) ピット

SA 1柱列状遺構やS I 3 竪穴遺構を構成するピットとは別にⅢ層上面で多数検出されたが、柱痕と思われるものは認められず、互いの結びつきも判断できなかった。

堆積土はいずれも黒褐色シルト質砂であり、程度の差はあるが炭を含んでいる。

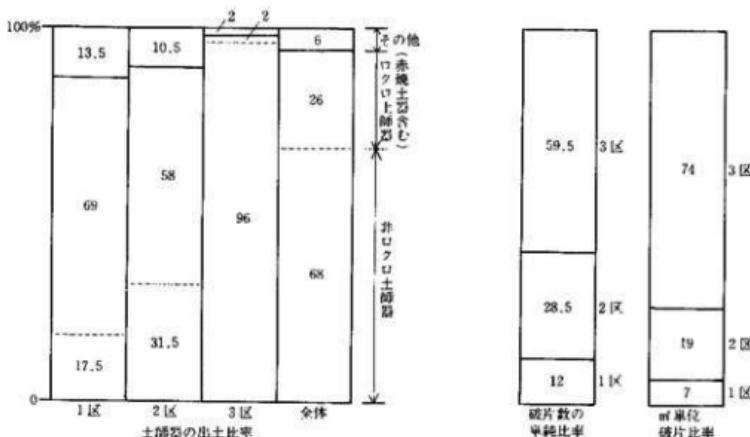


表1 土器の出土比率

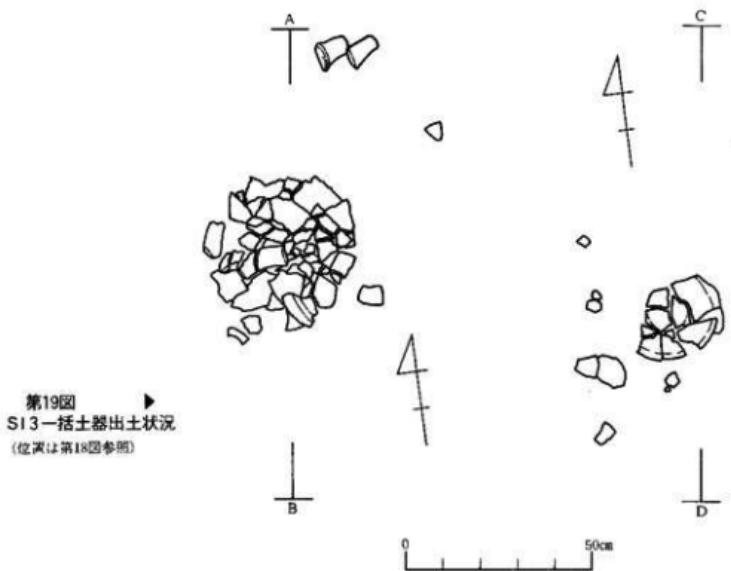
外面はロクロ調整、内面はヘラミガキで、第20図1～3及び第22図1以外のものは黒色処理が観察される。黒色処理が観察されなかった4点についても本来は黒色処理がなされていたものと思われる。底部は欠損しているものを除き、全て回転糸切り痕を残す。第20図3は回転糸切り痕を残す底部に、欠損しているが高台底も残すものである。

ロクロを使用していないもので図化できたものは3区出土の2点（第21図1・2）である。

1は口縁部がくびれて外反し、内側に稜がつき、体部上半がやや内湾するものである。体部はふくらみを持ち、全体的にゆるやかな曲線を描く。底部は平底である。調整をみると、口縁部が内外面とも横ナデ、体部は内面が横位のヘラナデ、外面上半が横位のヘラナデ、下半がヘラケズリされている。底部は平底であるが、薄いリング状の粘土帯が貼り付いたような状況を呈する。

2は1とほぼ同様であるが、口縁部のくびれが1以上にきつい。調整は内面が口縁部から底部までヘラナデされているのに対して、外面は口縁部から底部にかけて1と同様である。

＜壺＞ 図化できたものは3区出土の1点（第21図3）のみである。ロクロを使用していない有段の口縁部である。口縁部断面をみると、ほぼ直線的に外反するが、内面中央部が軽くくびれて段になっており、外面中央には稜がみられる。調整は若干磨耗しているところもあるが、稜より上は内外面とも横ナデ痕が観察される。その後内面はまばらであるが斜位のヘラミガキが、外面は斜位のヘラナデが全面的になされたようである。外面の稜線下の部分には若干ヘラケズリ痕もみられる。



VI. 出土遺物

出土遺物は土師器が全体の90%以上を占める。この他に須恵器、赤焼土器、布目瓦、中世陶器が少量出土している。また若干の石製品、鉄製品も見られた。

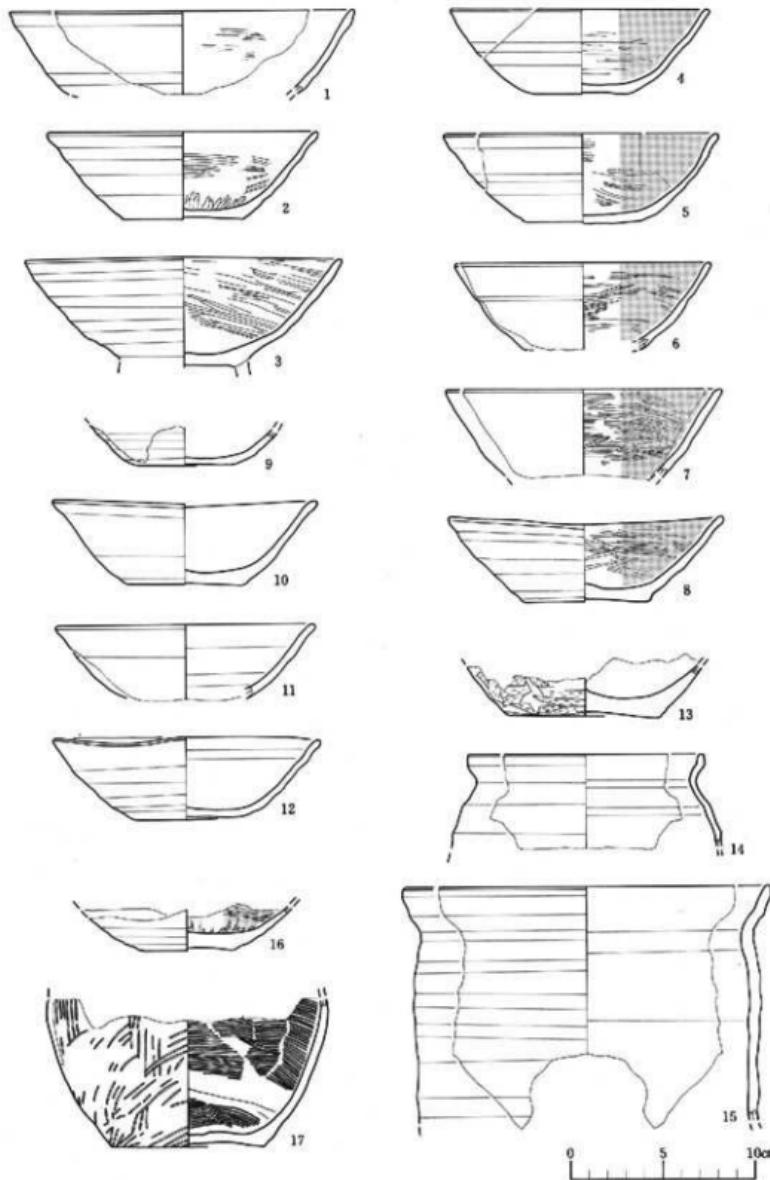
出土遺物の破片実数を単純に比較すると、3区が約59.5%、2区が約28.5%、1区が12%となっている。またそれぞれ調査面積が異なるので、1m²当たりの出土数を求め、三つの区で比較してみると、3区が約74%、2区が19%、1区が7%と3区の遺物の出土が圧倒的に多いことがわかる。(表1)

1. 土製品

(1) 土師器 (第20図、第21図、第22図 1~5)

土師器は全遺物量の90%以上に達し、大きくロクロを使用したものと、未使用のものに分けられる。ほとんどが破片資料であり、接合等により実測のできたものの数は少ない。

<环> ロクロを使用しているもので図化できたものは13点(第20図 1~8・16、第22図 1~4)である。第20図 1~8が1区、16が2区、第22図 1~4が3区出土したものである。



第20図 出土遺物 I

＜甕＞ 出土破片中で最も多いのが甕片であるが、図化できたものは6点（第20図13～15・17、第21図14、第22図5）である。第20図13～15が1区出土、17が2区、第21、22図に示したもののは3区出土である。

1区と第22図5に示したものがロクロ使用のもので、底部が残っている第20図13と第22図5は回転糸切り未調整である。

他のものはロクロ未使用のものである。第20図17のものは内外面ともハケ目調整され、外面底面には網代压痕が見られる。第21図14の甕は3区S I 3堅穴遺構内（C、D層上面）一括出土のもので、第5、18図中に実測位置（A-B）を、第19図に出土状況を図示してある。口縁は折り返し口縁で、内外面とも横ナデされている。内面体部は横位のヘラナデ、外面体部は上半がヘラナデが主になされ、下半がヘラケズリされている。

ロクロ未使用甕口縁部は、この他に、小破片で図示しなかったが、単純口縁のものがあり、量的にはその方が圧倒的に多い（第24図）。

＜高杯＞ 第21図4～13に図示した。坏部と脚部が一体として把握できたものは残念ながらない。よって坏部と脚部をそれぞれ観察する。ロクロは未使用である。

4は3区S I 3堅穴遺構（C、D層上面）一括出土のもので、第5、18図中に実測位置（C-D）を、第19図に出土状況を図示した。坏部中央がくびれて段がつき、外面に稜がめぐる。稜を境に下半はほぼ直線的に外傾し、上半は曲線を描いて外反する。稜は貼り付けられたものではなく、壺や甕の二段口縁風になって形成されている。坏部下端も稜というほどではないが、坏部底面がほぼ水平に作られているため、一見稜帯状を呈している。調整痕は外面にあっては中央部の稜線やや下から口縁部にかけて、そして坏部下端が横ナデ、坏部の下半と、底面をなす部分がヘラケズリとなっている。また内面にあっては、口縁部が外面ほどはっきりしていないが横ナデされており、他の部分はヘラナデである。

5は3区III-3層にのっており、S.I.2とSK2のわずかな空間に残存していた。坏部にはくびれや稜帯はなく、ほぼ水平をなす底面部より、ほぼ直線的に外反して口縁部に至る。調整は内外面口縁部が横ナデ、それ以外の内面がヘラミガキ、外面が下半がヘラケズリ、底面に当たる部分がハケ目となっている。

脚部も裾部が残存しているものもなく、柱状部片だけの図化となった。形体的には、直立に近いもの（8）、裾部に近づくにつれて広がって入るもの（10）、中央部がやや脹らんで裾部近くが広がっているもの（4～7・9・11～13）がある。調整は磨耗で見えない部分もあるが、10と13を除いては外面にヘラケズリが見られる。13は外面ヘラナデである。内面はシボリ目痕をそのまま残しているが、12はそれを消すようにヘラナデしてある。

(2) 赤焼土器 (第20図9~12)

赤焼土器としたものは、胎土、焼成が土師質で、ロクロが使用され、内面にミガキや黒色処理が施されていないものである。4点國化できたが全て1区II層出土である。このうち9は磨耗著しく、上記条件を本来的に満しているか不明瞭な点も多い。底部を残す9、10、12は回転糸切り未調整である。全点坏である。

(3) 須恵器 (第22図6~8)

須恵器片は土師器片に比べると非常に少量である。ちなみに1区では6点、2区では76点、3区では36点である。器種としては壺、甕、壺、蓋、円面覗片である。このうち國化できたのは壺2点と円面覗片1点だけである。

6は3区SK1土坑に切られるSA1のピット2出土の壺片で、内外面ともロクロ調整され、底部は回転ヘラケズリ調整されている。

7は3区II層出土で、内外面ロクロ調整、底部は手持ちヘラケズリされている壺である。

8は6と同じ場所で出土の円面覗片である。縦方向に約1.7cm間隔のヘラ描きの沈線が施されているほか、ほぼ 4×7.5 cmの方形の窓が切られている。脚部下端は甕や壺の口縁部を逆さにしたような様相で、下幅約3mmで断面が三角形を呈する隆線が周り、そこより端部は薄くなっている。下端部直径は22.2cmと推定される。

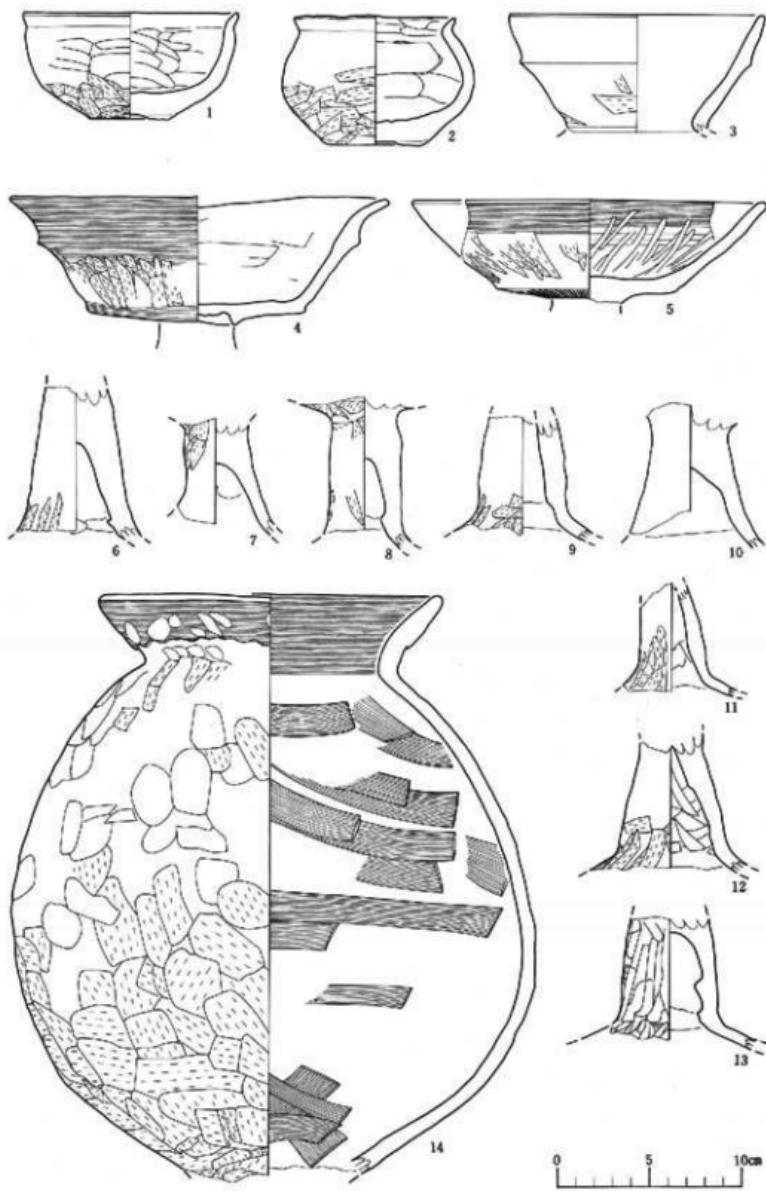
これらの須恵器片の絶対数は少ないものであった。上記以外の壺片は少数であり、底部切り離し技法がわかるものも少なくなかったが、2区III層と3区SK4土坑に回転糸切りのものが各1片含まれている。甕や壺片は須恵器片のほとんどを占めるが、内外面ともロクロ調整されているもの、外面に平行叩き目痕、格子叩き目痕を残すものがある。内面に青海波文が見られるものも若干ある。これら甕や壺片は、本来、一個体であったろうと観察されるものが多いが、2~3片の接合がなっても国示できるほどにならなかったものである。(第26図)

(4) 中世陶器

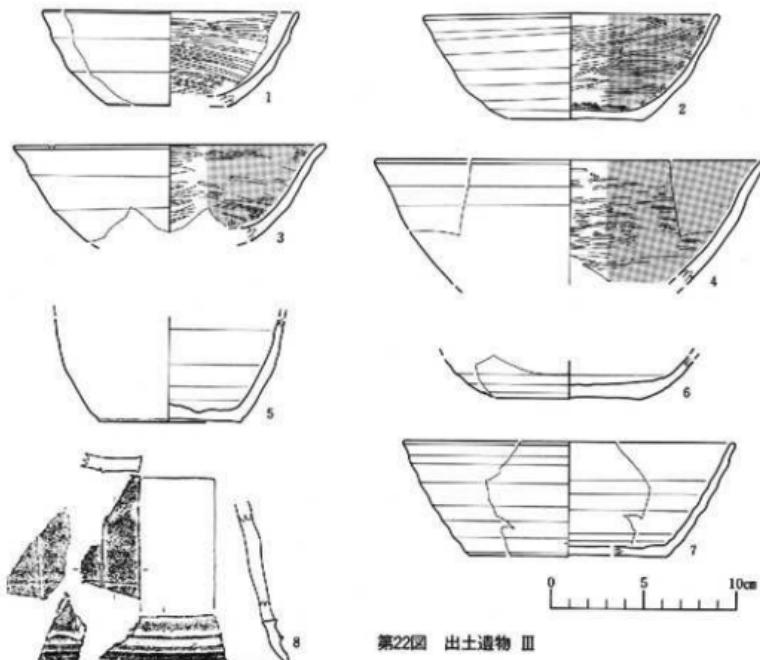
1区II層より甕片1、2区II層より甕4片、鉢2片、3区II層より甕1片出土している。絶対数は極めて少ない。2区II層の1点を除き、常滑製品と考えられるものである。国示できるものはない。甕片は体部片で、鉢片は口縁部片である。(第27図)

甕片は茶褐色を呈し、簾状格子目の押印痕を残すものが2区出土のものに2点認められる。内面にはあて道具の痕跡は見られない。1点は表面に一条の釉の流れが、内面には釉の吹き出しが見られる。

鉢片は内外面とも横ナデ調整の痕跡を示す。ほぼ直線的に外反する体部が口縁部でさらに外反している。口縁部は丸く仕上げられている。色調は須恵器とほぼ同様で、内面には若干、釉の吹き出しが見られる。

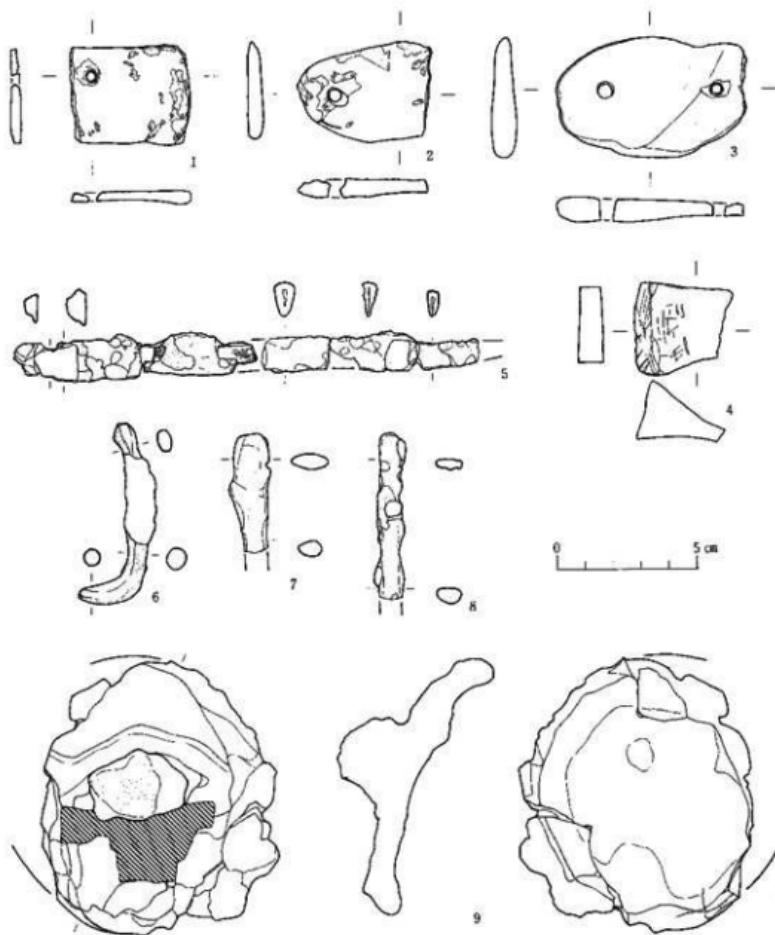


第21図 出土遺物 II



第22図 出土遺物 III

番号	器種 (高さ: cm)	出土場所 基盤・位置	内面 模様	裏面 模様	縁 模様	特 徴 (周長: cm)	出土地図 基盤・場所
20-1	土器壺 口径18.4 高さ16.8	内面-1 手すき、底面-2 手すき、外面-3 クロ網目	1区 Ⅲ層	23-4	土器壺 縁部	内面-ナメ、手すきハラケズリ SL3	3区 S1.3 5-3
20-2	* 内面-手すき、外面-1 休格、横口-2 手すき、底面-3 網目	*	6-14	23-5	*	内面-ナメ、ハラケズリ、外面-ナメ、手すきハラケズリ、ハラケ SL3	3区 S1.3 5-10
20-3	* 内面-手すき、外面-2 クロ網目、底面-3 切り、底付 口径17.1 高さ16.8	内面-2 手すき SL2	6-15	23-6	*	内面-一部に手すきハラケズリ見られる SL3	3区 S1.3
20-4	* 内面-手すき、底面-3 不規則、外面-1 ロクロ網目、底面-2 口径17.7 高さ16.1 底付-1 手すき白色	1区 Ⅲ層	6-13	23-7	*	外面-一部に手すきハラケズリ見られる *	*
20-5	* 内面-手すき、底面-2 不規則、外面-1 ロクロ網目、底面-2 口径14.5 高さ16.3 底付-1 手すき白色	*	6-12	23-8	*	外面-一部に手すきハラケズリ見される SL3	3区 S1.3 5-12
20-6	* 内面-手すき、底面-3 不規則、外面-1 クロ網目 口径13.6 高さ16.4 底付-1 手すき白色	*	23-9	*	*	外面-一部に手すきハラケズリ見される SL3	3区 S1.3
20-7	* 内面-手すき、横口-2 手すき、外面-1 ロクロ網目 口径14.8 高さ16.8 底付-1	*	23-10	*	*	調査不明	3区 S1.3
20-8	* 内面-手すき、底面-1 手すき、底付-2 手すき、底面-3 口径14.0 高さ16.1 底付-1 手すき白色	*	6-17	23-11	*	外面-一部に手すきハラケズリ見される SL3	3区 S1.3
20-9	底盤上部 内面-1 クロ網目、底面-2 ロクロ網目、底面-3 手すき白色	*	23-12	*	*	内面-ナメナメ、外面-一部に手すきハラケズリ見される *	5-13
20-10	* 内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、底面-2 口径14.2 高さ16.3 底付-1 手すき白色	*	7-1	23-13	*	外面-ハラケナメ SL3	3区 S1.3 5-14
20-11	* 内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目 口径13.6 高さ16.4 底付-1	*	23-14	*	*	土器壺 Ⅲ層 内面-ナメ、ハラケナメ 外面-ナメ、ハラケナメ、手すきハラケズリ SL3	3区 S1.3 5-1
20-12	* 内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、底面-2 口径14.2 高さ16.5 底付-1 手すき白色	*	6-18	23-1	H	内面-2 手すきナメ 外面-1 ロクロ網目 口径14.6 高さ16.3 底付-1 手すき白色 *	2区 S1.3
20-13	* 内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、底面-2 手すき白色	1区 SK2	6-2	22-2	*	内面-手すき白色、外面-1 ハラケナメ、手すき白色 外面-2 のぼり網目、底付-1 手すき白色 *	3区 S1.3 5-15
20-14	* 内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、底付-1 手すき白色	1区 Ⅲ層	6-11	22-3	*	内面-手すき、底面-1 手すき白色、外面-1 ロクロ網目 外面-2 のぼり網目、口径15.6 高さ17.1 手すき白色 *	3区 S1.3 5-16
20-15	* 内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目 口径13.7 高さ16.8 底付-1 手すき白色 (内面)	*	6-16	22-4	*	内面-1 手すき白色、底面-1 手すき白色 口径13.8 高さ16.8 底付-1	3区 S1.3
20-16	上部壺 内面-1 手すき、外面-1 ロクロ網目、底付-2 手すき 手すき白色	2区 Ⅲ層	7-5	22-5	變 變	土器壺 内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、底付-4 内面-2 手すき白色	3区 S1.3 5-17
20-17	上部壺 内面-1 ナメ、手すき、底付-1 手すき 手すき白色	*	6-1	22-6	變	内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、底付-1 内面-2 手すき白色	S1.1(3)
20-18	内面-1 ナメ、手すき、底付-1 手すき 手すき白色	3区 SK2	5-7	22-7	*	内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、手すきハラケズリ 内面-2 手すき白色	3区 S1.3
20-19	内面-1 ハラケナメ、手すき、底付-1 手すき 手すき白色	3区 S1.1	5-8	22-8	變	内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、底付-1 内面-2 手すき白色	3区 S1.1(3)
20-20	土器壺 内面-1 手すき、外面-1 ロクロ網目、底付-1 手すき白色	3区 S1.3	5-6	*	*	内面-1 ロクロ網目、外面-1 ロクロ網目、底付-2 手すき白色 内面-2 手すき白色	3区 S1.3



第23図 出土遺物 IV

番号	種類	特徴	直徑(単位cm)	出土場所	区分	厚さ	種類	特徴	直徑(単位cm)	出土場所	区分	厚さ
23-1	骨孔 G15	平欠扁孔1 穴径4.2 壁厚0.3	2区 S15	8-8	23-6	*	骨	長26.5		2区 G15	8-12	
23-2	+	平欠扁孔1 穴径4.7 壁厚0.3	2区 ヒット2	8-7	23-7	*	鉄鑿	長44.2 幅12.0 厚0.8		*	8-12	
23-3	+	縦膨大部孔2 穴径6.6 壁厚0.7	2区 S13	8-6	23-8	*	骨	長35.9 壁厚0.9		2区 G13	8-14	
23-4	磨石	平欠扁 呈方形 穴径3.2 壁厚0.5~2.1	2区 ヒット1	8-9	23-9	*	鉄鑿	直径9.4 壁厚0.9 磨耗材質有 フマニ花り	2区 ヒット1	8-11		
23-5	刀子	全長16.6 刃長15.0 壁厚1.3~0.8	1区 S10	8-15								

(5) 瓦

瓦片は1区II層とSD1溝跡から各1点、2区はII層とIII層から各2点、SD1溝跡から1点、3区はSK11土坑から1点出土している。全て凸面に縄目の叩き目、凹面に布目圧痕を残すものである。

(6) 羽口

全て破片資料で図化したものはない。1区のII層より4点出土している。

2. その他

その他のものとしたは鉄製品、石製品、鉄滓がある。

(1) 鉄製品

<刀子> (第23図5) 現長16.6cm、刀身15.2cm、幅1.2cmである。切先の部分は欠けている。刀身の断面は鋒の少ないところで観察すると、刃部は鋭く、背は平坦である。まちの所で段がついている。1区II層出土である。

<鉄鎌> (第23図7・8) 2点とも鉄鎌の先端部片と思われる。茎部の方の断面は楕円形を呈し、鎌先端断面は薄くなり偏平になる。茎部より先端部の方が幅も広くなっている。7は2区II層、8は1区II層からの出土である。

<釘> (第23図6) 2区II層出土である。全長8cm位で、先端2cmほどが折れ曲がっている。銹化が進んでおり、頭が原形を保っているのか折れているものか判定できない。

<蓋> (第23図9) 2区Pit1出土である。鉄瓶か壺のようなものの蓋になるものと思われる。外而と思われる中央部には「つまみ」状の突起が見られねが、銹化が著しく、詳細は不明である。周辺部に向かって若干背が丸くなるようになっているが、端部において更に折れ曲がっている。内面と思われる部分には、鋒で詳細は不明であるが、背に対応するように丸く仕上げられているだけのように観察できる。

なお、外面「つまみ」の一端に接するように炭化材が付着していた。銹化が進行することにより鋒にとり込まれた状況になったものと思われる。

<棒状製品> 上記以外に、図化しなかった棒状のものが2点ある。いずれも銹化著しく特定できない。

(2) 石製品

<有孔石製品> (第23図1~3) 1はスレート製で3区S13竪穴遺構出土のものである。半欠品である。残片に孔が1個、片面から穿孔されている。2は2区II層のPit2出土である。1と同じように半欠品であり、両面穿孔された孔が1個見られる。3は1と同じく3区S13竪穴遺構出土である。一端が若干欠けている。孔は2個で、片面穿孔である。一見、小型石包丁の未成品というところである。

〈砥石〉(第23図4) 2区III層から1点出土した。板状の長方体のものであったと思われる半欠品で、表裏側面とも使用されている。特に表裏面はかなり使用されたらしく、断面三角形に見えるほど磨耗している。

(3) 鉄滓

1区はII層及び小溝遺構、S X 1不明遺構、S D 3溝跡から、3区はII層から出土している。

VII. 考察とまとめ

1. 遺物の年代観

(1) ロクロ未使用土師器

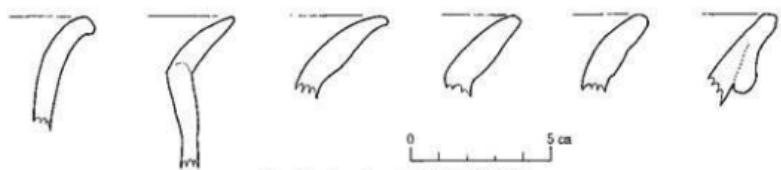
ロクロを使用しない土師器は今回出土土器中の約90%を占める。壺、壺、甕、高壺の4器種が認められている。器台が認められないことや、ハケ口調整を主とするものが見られないなど、東北地方の土師器編年(氏家和典:1957)では南小泉式を主とするものであろうと思われるが、先に行われた鴻ノ巣遺跡出土遺物はもちろん、特に近辺遺跡出土遺物と比較し、さらに丹羽編年(丹羽茂:1983)とも対比させることにより、それらの年代にせまりたい。

壺(第21図1・2)

1 鴻ノ巣遺跡の壺A II a~cのいずれかに該当するよう(白鳥良一・加藤道男:1974)、引田式類似のものも含めて南小泉式に位置付けられている。南小泉遺跡では第5、7号住居跡出土の壺に類似するものがあり(結城慎一:1982)、壺単独では塙釜式~引田式の違いを明確にすることはむずかしいとしたうえで、共伴遺物を総合的に見て南小泉式に該当させている。また新田遺跡出土壺14(小笠原好彦・阿部義平:1968)は形態的に類似するが、体部外面にハケ目が残るということで若干調整が異なる。新田遺跡出土のものは「出土状態からは一時期のものと考えられたが、その特徴からはこれまで仙台市南小泉遺跡などで出土している東北地方土師器の第二型式(南小泉式)に相当するものと、第一型式(塙釜式)に位置づけられているものがある」としたうえで、壺14を南小泉式に比定している。

この壺はやや厚手で調整痕にミガキが認められないことに注意を払いたい。このような壺は南小泉遺跡で出土例がある(伊東信雄・結城慎一・工藤哲司:1978)。

2 これについてもヘラミガキ痕が認められない。鴻ノ巣遺跡出土のものに類似するものがないが、口縁部~底部の状況はA類の範囲に入るものだろうか(白鳥・加藤:1974)。南小泉遺跡からは類似するものが出土しており(伊東・結城・工藤:1978 渡辺誠:1985 佐藤洋:1987)、後二者は丹羽編年の南小泉式A群土器に比定している。



第24図 非口クロ土師器壺口縁断面

壺 (第21図3)

口縁部片で全体を知ることができない。鴻ノ巣遺跡から類似する口縁部をもつものが発見されていないが、口縁中頃に段が形成されているということを共通項としてA類塙釜式の範ちゅうと把えたい。新田遺跡の遺物では塙釜式に比定されている壺Dに類似するようであるが、これは口縁部外面がハケ目→横ナデということで若干調整を異にする。

壺 (第20図17、第21図14)

17 体部上半を欠くが、薄手で荒いハケ目をもち、底部に網代仕痕が見られることを特徴とする。ハケ目調整が残るのは氏家編年によれば塙釜式と栗囲式であるが、塙釜式はハケ目が細く、ハケ目でいえば栗囲式に近い。しかしながら底部が厚く、丸味をおびながら体部に立ち上がりしていく栗囲式の特徴は認められない。ロクロ土師器が出現する表衫ノ入式との間の国分寺下層の一形態と把えておきたい。南小泉遺跡SI-03、04出土の壺を表衫ノ人式でも古い段階に位置付けていることを考慮すれば(佐藤:1987)、そう矛盾のないところであろう。

14 鴻ノ巣遺跡でみれば全体的な形状としてはB IIに近いが、口縁部が折り返しになっていない。ここでは折り返し状になる口縁はA類の範ちゅうになるようである。南小泉遺跡では第13次調査1号住居跡出土壺(C-5)が形態としては類似する(渡辺:1985)。やはりこれも折り返し口縁になっていない点で異なるが、同住居跡出土の壺C-9が折り返し口縁になっていることから、南小泉式の古い段階に位置付けられているこの壺とそう変わらないものと考えられる。丹羽編年では南小泉式A群に多賀城市山王遺跡13号遺構出土の壺I b類(高倉敏明:1981)をおいている。これは折り返し口縁である。

この他、単純口縁部片が若干あるが、丹羽編年の南小泉式A群に類似したものがB群に類似するものより多いようである。

高坏 (第21図4~13)

4 調整は若干異なるが、郡山遺跡に類例がある(金森安孝:1983)。壺や壺の二段口縁状になって稜をもつこと、及び壺(第21図3)や壺(第21図14)と同様に3区S I 3竪穴遺構出土であることから、塙釜式の影響を残す南小泉式と考えられる。鴻ノ巣遺跡B III類の坏部の雰囲気にも似ているところもあるが、口縁端部、稜線、調整は異なる。

5 坏部のみである。形態的にも、ハケ目が見られるものもあるということでも、鴻ノ巣遺跡出土坏のD類に該当するものと考えられる。報文によれば南小泉式に比定されている。さらに丹羽編年では南小泉式のB群土器として位置付けられている。

その他脚部片であるが、円孔をもつものがなく、鴻ノ巣遺跡でいうI～III類の範囲におさまる、南小泉式で一括できそうである。丹羽編年でいう塩釜式C群土器～南小泉式C群土器の脚部のどれに当たるかは単体での区別はむずかしい。ただし6、7、9、11、12が3区S I 3堅穴造構、10、13がSK13土坑出土で、8がそれらの検出面より上のII層出土である。S I 3とSK13の検出面は同じであり、S I 3から壺（第21図3）、壺（第21図14）、坏部（第21図4）、SK13からは坏（第21図1）が出土しており、前述したように南小泉式でも古い段階と位置付けられる。II層出土の8が一番直立気味であることがここでは指摘できる。

年代観 上段で編年的な位置付けをしたが、それらの年代として丹羽編年を当てると、第20図17の壺を除いて、南小泉式の諸段階に位置付けられた。すなわち南小泉式でも古い段階と表現したものも含めてA群土器が5世紀前葉、B群土器が5世紀中葉、C群土器は5世紀後葉である。第20図17の国分寺下層式とえた壺については、さらに下ノ内遺跡第2号住居跡出土資料（篠原信彦：1982）と調査者の指摘により、国分寺下層式末～表杉ノ入式初原と詰めておきたい。年代的には8世紀末である。

（2）ロクロ土師器

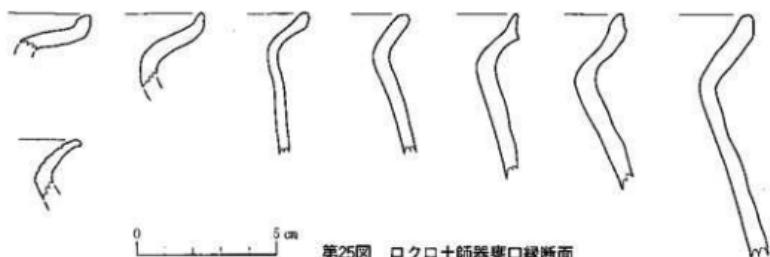
ロクロ土師器は東北地方の土師器の編年（氏家編年）によれば表杉ノ入式に当たり、平安時代の土器とされている。以下器種ごとに表杉ノ入式とのへんに位置するのかを検討する。

坏（第20図1～8・16、第22図1～4）

ロクロ土師器片で坏の占める割合は約60%であるが細片が多く、図示できたのは13点だけである。第20図1～8が1区II層出土、16が2区III層出土、第22図1～4が3区II層出土である。第20図3は高台が付つ。

高台付坏を除いて数値的に見てみよう。底径／口径を見ると1区は0.37（第20図4）が1点かけはなれているほかは0.43～0.46の範囲に分布する。2区は図示できた1点が口縁部を欠くので不明。3区は底径、口径とも知れるのが2点で、どちらも0.46になる。これらは宮前遺跡の報告書中に検討されたもの（丹羽：1983）に対比させると、東山遺跡土器溜ないしは家老内遺跡第2号住居跡、宮前遺跡第54号住居跡出土坏の分布範囲にはほぼ一致する。この丹羽編年によれば東山遺跡土器溜出土坏を9世紀中葉付近におき、家老内遺跡と宮前遺跡前記住居跡出土坏をそれに直接後続するものとしている。

器高／口径でみると、1区が0.31～0.37、3区のものが0.37～0.38となり、あまりバラツキがない。



第25図 ロクロ土師器妻口縁断面

口径からみると、1区のものが13.6~18.4cm、3区のものが13.6~20.8cmになる。しかし1区は18.4cmを計るもの（第20図1）を除くと13.6~14.8cmである。なお高台付のものは17.1cmを計る。3区も20.8cm（第22図4）を除くと13.6~16.6cmである。この口径の大きなものは底部を欠くので、底部／口径がどのような数値になるかわからない。

ところで1区II~13層上面で検出されたピット堆積土の最上層に若干灰白色火山灰が認められた。II~13層はII層中でもほぼ最下層に位置している。この火山灰は基本堆積層には見られず、P1、2のほかはSK5に若干見られるだけであるが、10世紀前半に降下したものとみられている火山灰が二次堆積したものと考えられる。このように見てくると、層位的に10世紀前半以降という年代観が出てくる。

鴻ノ巣遺跡の以前の調査で火山灰が見られたのは昭和55年に調査した時にSD9溝跡から（工藤哲司・金森安孝：1981）、昭和56年調査時にSD11溝跡から（青沼一民・長島栄一：1982）であり、火山灰層より上部で出土した土器を、前者は表杉ノ入式と大きく把え、後者は坏BII類として表杉ノ入式で11世紀に比定している。後者の坏BII類は体部中央付近がややくびれる感じで、第20図6の坏に共通するところがある。底部回転糸切り無調整が主体というところも共通する。

以上を総合的に判断し、図示できた坏の年代を10世紀前半といわれる火山灰降下以降で11世紀までの平安時代中期に比定したい。

甕（第20図13~15、第22図5）

1区II層と3区II層出土のものである。図示できたものはなかったが、2区II、III層出土の破片が一番多い。

鴻ノ巣遺跡で昭和55年調査のSD9溝跡出土の甕、56年調査・甕B類、48年調査・甕FIIb類、FII類のものは（白鳥・加藤：1974）、破片資料も含めて出土している。宮前遺跡第IVA群土器中に鉢状の甕が含まれており、今回出土甕片中には認められない。坏同様、第IVB群土器（第54号住居跡出土）に類似し、出土層位も考慮すれば坏と同時期が与えられる。

壺

小破片が多く、図示できたものはない。出土層位から壺や壺と同時期のものと考えられる。

(3) 赤焼土器 (第20図 9~12)

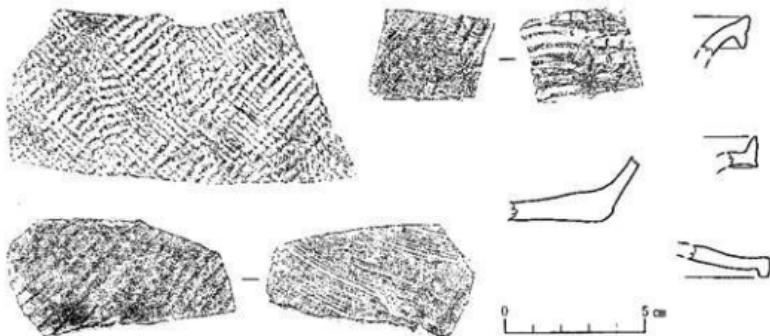
前述したが、ミガキ、黒色処理がなされていない壺を土師器と分離して赤焼土器とした。昭和48年に調査した渕ノ東遺跡では土師器壺のE III類に当たるものと思われる(白鳥・加藤: 1974)。56年調査の同遺跡出土赤焼土器で見れば、II類に属するものと考えられる(青沼・長島: 1982)。55年調査の際は土師質の土器として扱っており、図示されているA101に類似するものである。

今回図示できた中にも、破片中にも小形の壺や皿になるものがないうえに、壺と同様な出土層位であるので、10世紀前半から11世紀までの範囲で年代を与えておきたい。

(4) 須恵器 (第22図 6~8)

造構と結びつくと思われるものは、3区SK1土坑に切られているSA1柱列状遺構のP₂から出土した壺(6)と円面覗(8)である。これらは2区III層から割合多く出土している格子叩き目を残す墻片などと奈良時代に位置付けられようか。この他、第26図に蓋、壺、壺の断面図を示したが、これらの特徴を総合的に見ると大阪府陶邑窯T K313、314号窯出土遺物に類似するようで、IV型式3段階・奈良時代後期の年代覗となる(中村浩・1981)。この年代覗は土師器に国分寺下層～表杉ノ入式の過渡期的なものが見られることもあり、さほど矛盾がないものと考えられる。

その他破片の多くは壺片で、その中の底部片を見ると回転糸切り未調整のものだけである。同じく陶邑窯で見ると、V型式1段階の壺は回転ヘラ切り未調整が主体で、静止糸切りも見ら

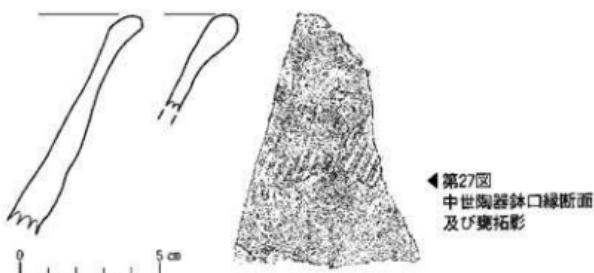


第26図 須恵器變拓影及び壺、壺、蓋断面

れるという点で異なり、V型式2段階に類似性が認められる。これらの年代観はロクロ土師器でみてきたように10世紀前半から11世紀までと把えておきたい。

(5) 中世陶器 (第27図)

少量で産地は常滑と見られる（1点不明）。口縁形状がわからぬので時期不明であるが、第27図の鉢は、その口縁形状から南北朝期の高台付になるものと考えられる。



◆第27図
中世陶器鉢口縁断面
及び焼成影

2. 遺構の変遷

(1) 1区

遺物を出土遺構は量の多少にかかわらず、ロクロ土師器、非ロクロ土師器を出土するので、前段でふれた遺物の年代観より10世紀前半から11世紀の間で把えられるものである。よってこの範囲において、発見層位及び重複関係より遺構の変遷をまとめたい。

まずII層上面から遺構の掘り込みが認められるのはSD 2・4・5溝跡、焼土遺構である。前にII-13層で検出されているSD 3溝跡とP 1、2となるだろう。SD 3とP 1・2との関係は直接的にはわからぬが、調査時にIII層上面検出になったSK 5土坑にも若干の火山灰が認められ、SK 5がSD 3に切られていることから、本来はP 1・2はSK 5とともにSD 3に若干先行する遺構であったと考えられる。SK 2・3・6・7土坑及びSD 6～9溝跡についてはSD 3に切られているか、III層上面で確認されたため、P 1・2及びSK 5に先行するものであろう。

またSK 1土坑、小溝遺構、SX 1性格不明遺構もIII層上面で確認されているが、他のIII層上面で確認されている遺構との関係は不明である。

調査区内で検出された河川跡については、上層より中世陶器片が発見され、中世までは調査区内が埋まりきり、さらに東側に移動したことが推定できる。

ところでII層上面で検出されたSD 2・4・5溝跡も堆積土中から平安時代以前の土器片だけが発見されたことから、平安時代の範囲で把えたが、後述する2区との層位関係や河川

側II-8層から中世陶器片が発見されていることを考え合わせると、中世遺構の可能性も否定できない。

(2) 2区

出土遺物は古墳時代の南小泉式の土師器から中世陶器まである。中世陶器はII-1層～II-4層までの層間で発見されているので、II層上面で検出されているピットは中世に位置付けられる。P2より中世陶器の鉢片が出土している。また河川跡も上層に若干中世陶器片を出土するので、調査区内で検出された部分についていえば、中世までに堆積土に覆われたものと言える。また中世陶器片の発見はないが、層堆積の類似性よりII層全体を中世の堆積と考えたい。

II層以下の層及びSD1溝跡、焼土遺構については、南小泉式から表杉ノ入式の土師器が混在するので10世紀前半から11世紀にかけての堆積層及び遺構と考えざるをえない。層位的にみれば焼土遺構がSD1溝跡に先行するものである。

(3) 3区

出土遺物及び堆積土から考え、I層が現代層、ほぼII層が中世・平安時代層であり、III-3層上面より掘り込まれている遺構がそれ以前の年代が与えられる。

II層発見遺構は層位及び切り合い関係より以下のように考えられる。まずSK8・9土坑が一番新しい遺構であるが、出土遺物が確認できなかつたので、中世か平安時代に属するものの判断はできない。それ以前にくるのがSK10・11土坑である。SK11から平安時代に属する平瓦片が出土している。III層上面で確認されたSK1・2・3・7土坑中からは南小泉式や表杉ノ入式の土師器が出土するので、平安時代遺構中で最古に属するものであり、本来はII層中の最下層からの遺構であったことを考えさせる。

これらに先立つものと考えられるのは円面鏡などの破片を出土したSA1柱列状遺構であり、須恵器の年代観でもふれたように、奈良時代後期の遺構と考えられるものである。

当調査区で最古の遺構と考えられるものはSK13土坑、SI1・2・3堅穴遺構である。これらは土師器の検討より、南小泉式でも5世紀前半と考えられるものである。これらより新しく、しかも古墳時代の範囲におさまると考えられるものは、SI1・2を切っているSK4・5・6・12土坑であり、SK4がSK5を切っているという関係にある。SK4・5・6は非クロロ土師器のみを出土し、SK12からは遺物の出土はなかった。

3.まとめ

今回の調査は鴻ノ巣遺跡東端地区の宅地造成に伴うもので、七北田川堤防改修以前の旧堤防が大きく西側の造成地へ半月形に食い込んでいた周辺にあたる。調査の結果ではⅡ堤防よりさらに西側に河川跡が確認され、中世には調査区内の河川は埋まり切ったようだ。

このように今回調査区は前3回調査とは位置的に異なる様相があつたようだ。もちろん調査

面積に差異があり、単純に比較できないこともあるが、これまでには溝跡、土坑、ピットはもとより、竪穴住居跡、井戸跡、周溝墓の発見も伴い、生活跡を多く残していた。今回の調査ではピット、土坑、溝跡がほとんどで、3区に柱列状遺構と竪穴遺構と若干様相の異なるものが発見されたものである。

発見された竪穴遺構の性格はどのようなものであろうか。3区S11・2・3は一定の方形性があるように見うけられる。また河川近くということと、地下水位との関係で常に水が湧く状況であった。

柱列状遺構(SA1)は奈良時代後期に属すると思われる遺構で、今後どのような遺構と関連が考えられるか注意していく必要があろう。

当調査区は河川のすぐそばであることから、住居跡等の発見がなかったものと考えられるが、一方、3区で発見された古墳時代中期の竪穴遺構や奈良時代後期の柱列状遺構は、逆に川との関係を積極的に考えさせる遺構とは考えられまい。当地と七北田川を挟んだ地域には、古墳時代から中世にかけて新田遺跡があり、そこより2.5kmも東北東に進んだところには多賀城跡がある。また七北田川を約6.5km南東方向へ下れば太平洋へ出られる。

鴻ノ巣遺跡の調査は今回も含めて少なく、面積の合計も少ない。個々の調査により断片的な資料を得ることはできても、遺跡の全様、構造はまだまだ見えていない。遺跡内の調査区の位置付けを明確にするような調査が今後とも必要である。

註記

1. 白鳥良一・加藤道男ほか「岩切鴻ノ巣遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」(宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局1974)
- 金森安孝・工藤哲司「鴻ノ巣遺跡」(仙台市教育委員会1981)
- 青沼一民・長島栄一「鴻ノ巣遺跡」(仙台市教育委員会1982)
2. 榊原信彦「下ノ内遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ」(仙台市教育委員会1982)
p10・第7図6・8の壺は2号住居跡出土。6はロクロを使用した小型の壺で、体部外面は回転ハケ目が、体部下部および底面がヘラケズリされている。8は長胴形で外面にヘラナデ、ハケ目、ヘラケズリと体部上部から調整痕が残り、底面には木葉痕が見られる。内面にはヘラナデ痕がある。ロクロ未使用である。概報では平安時代と大きく記述していたが、現在本報告書作成中で、表形ノ入式でも最古か、国分寺下層式に入っていくものという考え方をもつているという。

参考文献

- 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』1957
- 氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』1967
- 小笠原好彦・阿部義平「宮城県新田遺跡出土の土師器」『考古学雑誌54-2』1968
- 白鳥良一・加藤道男「岩切鴻ノ巣遺跡」『宮城県文化財調査報告書第35集』1974
- 伊東信雄・結城慎一・工藤哲司「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第13集』1978
- 高倉敏明・瀧口卓・白石直子「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書第2集』1981
- 工藤哲司・金森安孝「鴻ノ巣遺跡」『仙台市文化財調査報告書第32集』1981
- 中村浩「和泉陶邑窯の研究」柏書房1981
- 森貢喜「水人遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書第84集』1982
- 結城慎一「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第35集』1982
- 青沼一民・長島栄一「鴻ノ巣遺跡」『仙台市文化財調査報告書第44集』1982
- 丹羽茂「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書第96集』1983
- 加藤正範・結城慎一「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第60集』1983
- 結城慎一・佐藤洋「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第68集』1984
- 佐藤甲二・小野寺和幸他「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第80集』1985
- 渡辺誠「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第81集』1985
- 佐藤洋「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第109集』1987



▲ 1区全景（西→東）途中経過



▲ 1区全景（東→西）完掘



▲ 1区SD 2、3溝跡と北側断面（南→北）



◀ 2区全景
(西→東)



◀ 2区北側断面
(南西→北東)



◀ 3区調査風景
(西→東)

写真図版2 遺構Ⅱ

3区全景(途中) ▶
(西→東)



3区全景(完撮) ▶
(西→東)



3区東部 ▶
SA 1 中心
(南→北)



写真図版 3 遺構 III



◀ 3区S11と
その断面



◀ 3区S13と
その北側断面

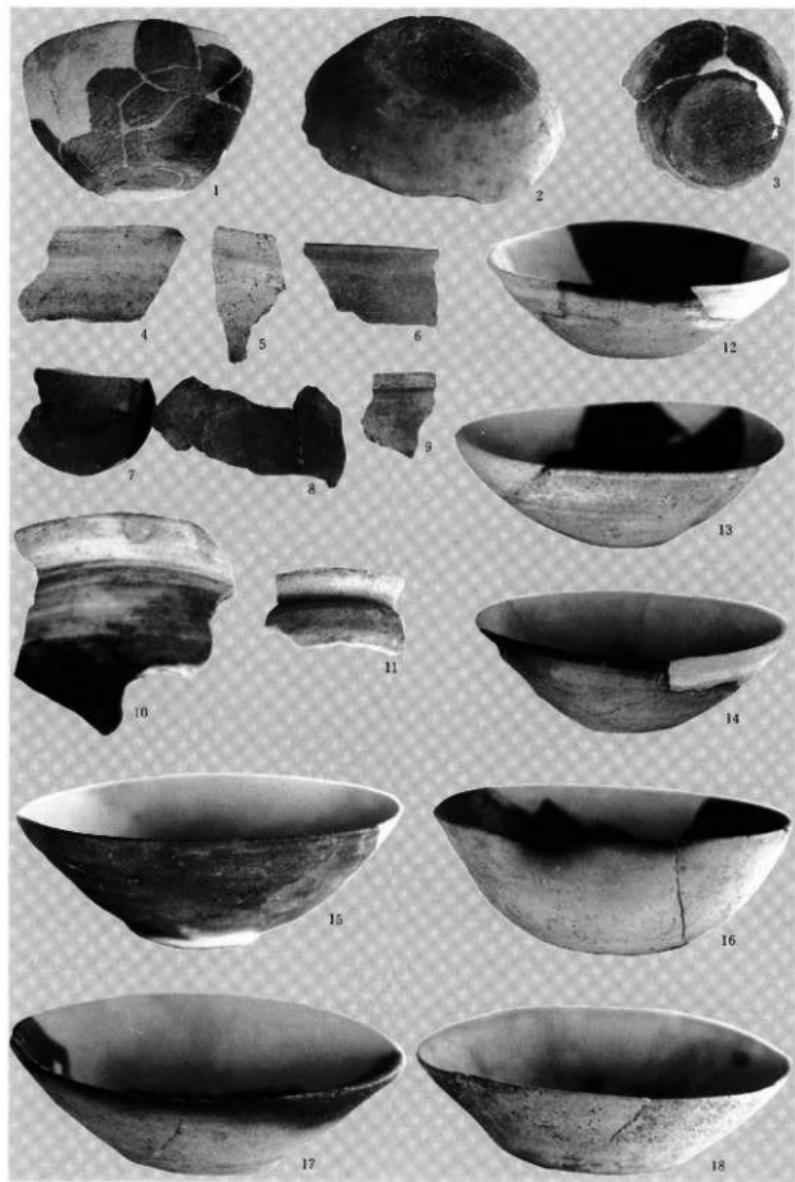


◀ 3区S13
一括土器出土状況

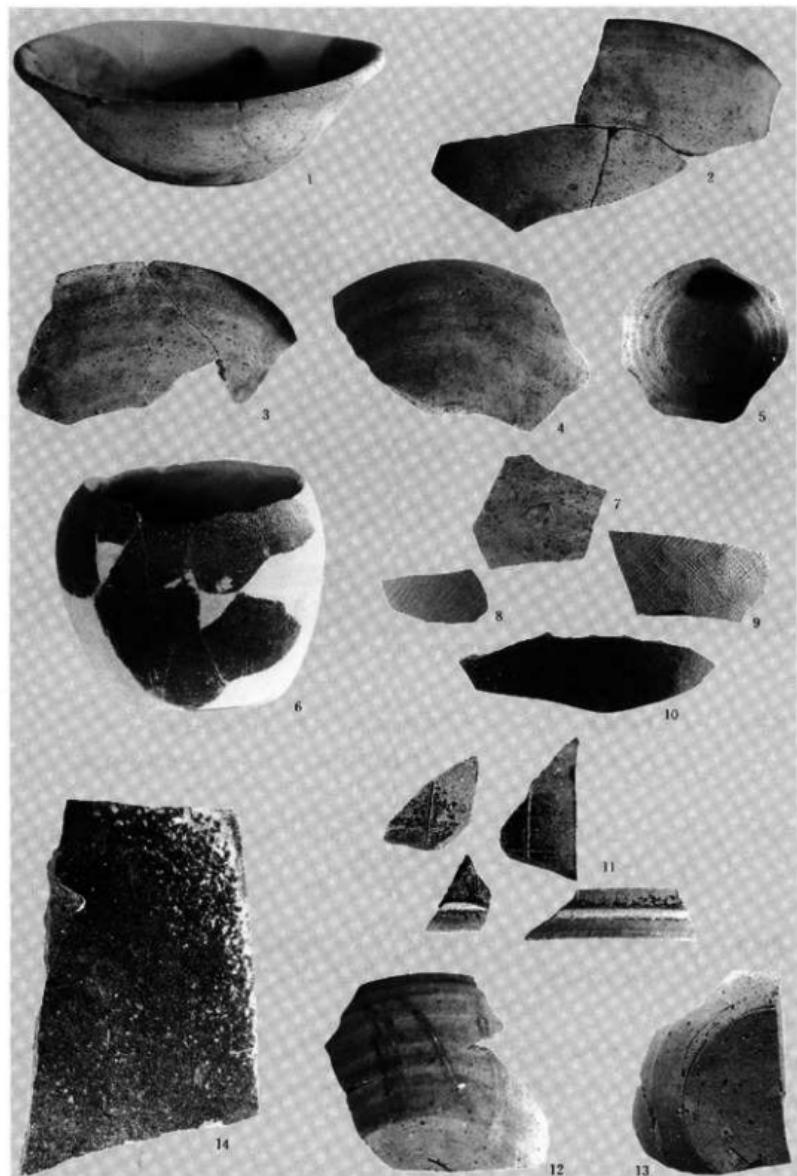
写真図版4 遺構IV



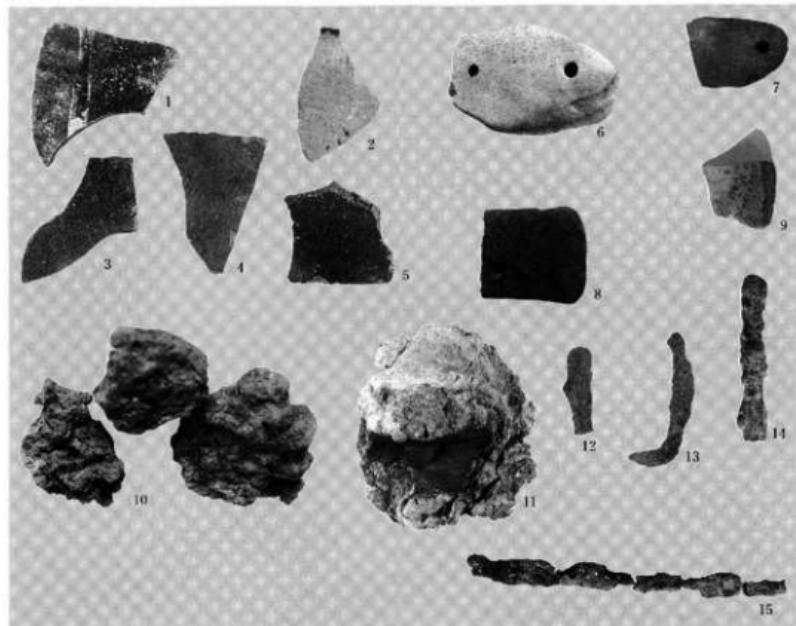
写真図版5 遺 物 I



写真図版6 遺 物 II



写真図版7 遺物 III



写真図版 8 遺 物 IV

遺物 I 1. 土師器甕 2～5. 土師器甕口縁部 6. 土師器甕口縁部

7. 8. 土師器環 9. 10. 土師器高环坏部 11～14. 土師器高环脚部

遺物 II 1～3. 土師器甕（底部） 4～9. 土師器甕、甕片 10. 11. 土師器甕口縁部
12～17. 土師器環 18. 赤焼土器

遺物 III 1. 赤焼土器 2～5. 土師器環 6. 須恵器甕 7. 須恵器甕、甕片
11. 須恵器凹面鏡片 12. 13. 須恵器環片 14. 平瓦片

遺物 IV 1～5. 中世陶器片 6～8. 有孔石製品 9. 砥石 10. 鉄滓 11. 鉄
蓋 12. 14. 鉄鎌片 13. 钉 15. 刀子

仙台市文化財調査報告書第123集

昭和63年度

鴻ノ巣遺跡

1989年1月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市墨町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 TEL 263-1166
